

## 和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）」（第19~20章）

外 薊 幸 一

### まえがき

本稿は前号（鹿児島国際大学『国際文化学部論集』第20巻4号）に掲載した和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）」（第16~18章）」に引き続くものである。「第19巻1号」（本シリーズ冒頭の号）所載の和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）（第1~3章）」の「まえがき」に記載したように、筆者は、すでにラリタヴィスタラ全27章の初訳を一応完了しているのであるが、もう少し読み易い和訳にすることを目標に「改訂版」を作成することにした。そして、これまでに第1章から第18章までを発表したので、今回はそれに続く形で、第19章と第20章を掲載する。なお、第15~21章は、拙著『ラリタヴィスタラの研究 中巻』の「第三部」に掲載したので、これらの章は『中巻』を底本とすることになる。

### 略号

方広 = 『方廣大莊嚴經』（大正新脩大藏經 187）. Chinese Translation of the Lalitavistara.

普曜 = 『普曜經』（大正新脩大藏經 186）. A Chinese Translation of the (old) Lalitavistara.

『佛教大辞典』 = 『望月 佛教大辞典（増訂版）』（昭和32年増訂版、世界聖典刊行協会）

『梵和大辞典』 = 荻原雲来編『漢訳対照 梵和大辞典』（昭和53年、講談社）

『佛教語大辞典』 = 中村元『佛教語大辞典』（昭和56年、東京書籍）

『上巻』 = 外薊幸一『ラリタヴィスタラの研究 上巻』（平成6年、大東出版社）

『中巻』 = 外薊幸一『ラリタヴィスタラの研究 中巻』（2019年、大東出版社）

BHSG = *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary* Vol. I : Grammar, by F. Edgerton, New Haven, 1953.

BHSD = Ditto, Vol. II : Dictionary.

### 括弧符号の使い分け

和訳の文章中において用いる括弧は、原則として、次のように区別する。

1. 「 」 は、会話文を示すために用いる。
  2. ( ) は、直前の言葉を、別の言葉で言い換えるために用いる。
  3. [ ] は、訳文を補充して、意味をはっきりさせるために用いる。
  4. < > は、特殊な複合語や、重要な熟語を示すために用いる。
  5. 《 》 は、東大主要写本に原文が欠落しているが、挿入すべきである部分の訳文に用いる。
  6. [ ] は、東大主要写本に原文が挿入されているが、削除すべきである部分の訳文に用いる。
  7. 【 】 は、諸写本に混乱があり、削除すべきか挿入すべきか確定しがたい部分の訳文に用いる。
- \*なお、第15章から第21章までの訳文の左端に付してある数字（40~446）は、『中巻』第二部（本文校訂）における梵語原文のページ数を示すものである。

---

キーワード：ラリタヴィスタラ、仏伝文学、大乘仏教、混淆梵語、仏教思想

# 『ラリタヴィスタラ』(大遊戯経)

## 第19章 (菩提道場往詣品)<sup>1</sup>

- 254 かくの如く、実に、比丘らよ、菩薩はナイルンジャナー河に於て沐浴し、また、食事をして、身体<sup>りきせい</sup>の力勢を興起せしめて、[マーラ(悪魔)より<sup>2</sup>] 勝利を得るために、十六相[の功德<sup>3</sup>]を具えた地處にある、偉大なる菩提樹王の根元<sup>ねもと</sup>なるところ、そこに、彼(菩薩)は<sup>4</sup>、大人物の歩調なるところの、次の如き歩調を以て進み行けり。[すなわち] 動揺することなき歩調、インドラの杖<sup>ひつぱく</sup>(虹)の如き歩調、山王メールの如き安定した歩調、陰湿ならざる歩調、屈曲なき歩調、逼迫せざる歩調、急疾<sup>きゅうしつ</sup>ならざる歩調、遲滞<sup>ちたい</sup>せざる歩調、動乱なき歩調、蹉跌<sup>さてつ</sup>なき歩調、[四肢が] 散動<sup>さんどう</sup>する<sup>7</sup>ことなき歩調、怯弱<sup>こにやく</sup>ならざる歩調、過度に緩慢<sup>かんまん</sup>ならざる歩調、輕躁<sup>けいそう</sup>ならざる歩調、<sup>9</sup>優美なる歩調、無垢なる歩調、清浄なる歩調、瞋恚<sup>しんに</sup>なき歩調、愚癡<sup>ぐち</sup>なき歩調、貪欲<sup>とんよく</sup>なき歩調、獅子の歩調、鷲鳥王<sup>がちょうおう</sup>の歩調、竜王の歩調、那羅延<sup>ナーラーヤナ</sup><sup>10</sup>の歩調、地面に触れざる歩調、千輻輪相<sup>せんぷくりんそう</sup><sup>11</sup>を地面に刻印する歩調、指間網・赤銅爪の歩調、大地を響かせる歩調、山が震動する歩調、凸凹<sup>でこぼこ</sup>を平坦となす足裏の歩調、[指の] 網の間から光線を發して衆生に触れるや善趣<sup>ぜんしゆ</sup><sup>12</sup>に赴く歩調、無垢なる蓮華を足下に置く歩調<sup>13</sup>、過去の淨善行の歩み[と同様]の歩調、過去の仏陀の師子《座》に近づく歩調、金剛の如く志願堅固に
- 256 して破碎せられざる歩調、一切の惡趣・惡道を閉じる歩調、一切の安樂を生起せしめる歩調、解脱道<sup>げどう</sup>を顯示する歩調、マーラ(惡魔)の力を無力となす歩調、邪惡な集団に属する外道異学の衆<sup>しやう</sup>を正法<sup>せっぽう</sup>によって摧伏<sup>さいぷく</sup>する歩調、癡暗<sup>ちあん</sup>の翳膜<sup>えいまく</sup>と煩惱とを滅除する歩調、輪廻の徒党<sup>だうたう</sup><sup>14</sup>を朋党なきものとなす歩調、帝釈・梵天・大自在天・護世王(四大天王)を凌駕する歩調、三千大千世界における第一の勇者の歩調、自存者にして[他者に] 凌駕せられざる歩調、一切を知る正智<sup>せいち</sup><sup>15</sup>に到達する歩調、正念と英知<sup>えいち</sup><sup>16</sup>の歩調、善趣に赴く歩調、老・死を滅除する歩調、安穩無塵にしてマーラ(惡魔)の

<sup>1</sup> 方広には「詣菩提場品」と訳されている。

<sup>2</sup> チベット訳 [bdud las rnam par rgyal bar bya baḥi phyir] によっても、方広の訳(降伏彼魔怨故)によっても、「マーラ(惡魔)より」に相当する原文があるべきも、どの写本にも見当たらない。

<sup>3</sup> 方広には「十六功德」と訳されているが、原文には「功德」に当たる語はない。

<sup>4</sup> チベット訳には「彼は」(asau) に当たる訳語はない。

<sup>5</sup> 「インドラの虹」(indra-yaṣṭi) は「虹」の意である (cf. BHSD,indra-yaṣṭi)。方広には「如虹蜺而行」と訳されている。「虹(こう)」と「蜺(げい)」はいずれも「にじ」である。

<sup>6</sup> 「蹉跌」とは「よろめき、つまずくこと」である。

<sup>7</sup> saṃghaṭṭita の意味は明確ではないが、チベット訳 [hḍrud pa] を参考に「締まりなくばらけて互いに擦れ合う」の意味とみて、「散動する」と訳す。

<sup>8</sup> 「輕躁」とは「落ち着きがなく、そわそわすること」である。

<sup>9</sup> チベット訳には「優美なる歩調」の前に「狼狽することなき歩調」(rtab rtab po med paḥi stabs) が挿入されている。

<sup>10</sup> 「ナーラーヤナ」(nārāyaṇa) は「ヴィシュヌ神の権化たる大力士」の呼称である。

<sup>11</sup> 「千輻輪」は「仏の三十二相の一つ」であり、「仏の足の裏にある千の輻(や)をもつ車輪のような模様」(『広辞苑』第六版参照) である。

<sup>12</sup> 「善趣」とは、「善道」とも呼ばれ、六道輪廻界のうちで「天界・人間の二趣、あるいは阿修羅・人間・天界の三趣」をいう。

<sup>13</sup> 方広には「所踐之地皆生蓮華」と訳されている。

<sup>14</sup> 「輪廻の徒党」(saṃsāra-pakṣa) とは「衆生を輪廻の迷界に繋縛する勢力としての渴愛や欲望」を意味すると思われる。方広には「絶生死翳羽而行(生死の翳羽を絶ちて行く)」と訳されている。

<sup>15</sup> 『中巻』には jñāna を「智」と訳したが「正智」に訂正する。

<sup>16</sup> 『中巻』には mati を「覚知」と訳したが「英知」に訂正する。方広の訳文「念慧相應而行(念慧相應して行く)」によれば、

怖畏なき涅槃<sup>ねはん</sup>の都城に赴く歩調、かくの如き歩調を以て菩薩は菩提道場に進み行けり。

かくして、実に比丘らよ、ナイルンジャナー河より菩提道場までの、その間を、風の雲<sup>17</sup>の天子たちは掃き清めたり<sup>18</sup>。雨の雲【の天子<sup>19</sup>】たちは香水を灑ぎかけたり。また、花を撒布したり。また、この三千大千世界に存在するところの樹木、それらの全てが、菩提道場のある方角に向かって頭を垂れたり。また、その日に生まれた子どもたち、彼らもまた、菩提道場に頭を向けて寝たり。また、この三千大千世界に於ける、スメール（須弥山）を初めとする諸<sup>もろもろ</sup>の山、それらも全て菩提道場の方向に向かって敬礼をなせり。【また】ナイルンジャナー河を起点として菩提道場に至るまでの、その間を、欲界の天子たちが、[道幅の] 広さが一クロシャに及ぶほどまで、【蓮華を以て<sup>20</sup>】道路を厳浄ならしめたり。また、その道路の左右の側辺には<sup>21</sup>、七種の宝石<sup>22</sup>より成る欄干<sup>らんかん</sup>が化作されたり。[その欄干は] セターラ<sup>23</sup>ほどの高さがあり、上は宝石の網に覆われ、天界の傘蓋・旗幟・幢幡によってみごとに飾られたり。また、矢の射程間隔ごとに<sup>24</sup>、七種の宝石より成るターラ樹（多羅樹）が化作され、[それらは] かの欄干よりも高く聳<sup>もび</sup>えたり。また、全てのターラ樹より次のターラ樹まで宝石の網が懸けられたり<sup>25</sup>。また、二つのターラ樹の間には蓮池が造られたり。[その蓮池は] 香水に満たされ、金の砂が敷かれ、ウトパラ（青蓮）・パドマ（蓮華）・クムダ（黄蓮）・プンダリーカ<sup>26</sup>（白蓮）に覆われ、宝石の欄干に囲まれ、階段は琉璃・珠寶（摩尼宝）によって飾られ、アーディ・バラカー・ハンサ（鵞鳥）・チャクラヴァーカ（鴛鴦）・マユラ<sup>27</sup>（孔雀）の啼声<sup>なきこえ</sup>に充ちたり。また、その道路を八万名のアプサラス（天女）たちが香水を灑いで清めたり。八万名のアプサラスたちが天界の芳香<sup>はなふき</sup>を有する花吹雪を散らしたり。また、全てのターラ【樹】の前面に宝石の天柱<sup>28</sup>が配置されたり。また、全ての宝石の天柱上に、八万名のアプサラスたちがチャンダナ（梅檀）・アガル（沈水）<sup>29</sup>の香末の[じょうご状の] 袋を持ち、カーラーヌサーリン<sup>30</sup>香料の香炉を持って立てり。また、全ての宝石の天柱上に、五千<sup>31</sup>名のアプサラスたちが天界の伎楽<sup>ぎがく</sup>を演奏しながら立てり。

かくして、実に比丘らよ、菩薩は諸々の地處を震動せしめ、百千拘胝尼由多<sup>コーティーニユタ</sup>の光線<sup>はな</sup>を放ちたま

mati は「慧」と訳されている。

<sup>17</sup> vāta-balāhaka はチベット訳にも「風の雲」(rluñ gi sprin) と訳されている。方広には「風天雨天」の訳語が見られる。つまり「風神と雨神が道を掃き清めた」との意である。

<sup>18</sup> 「掃き清めたり」の部分のチベット訳は「道路の掃除をなせり」という意味の訳文になっている。

<sup>19</sup> 「天子たち」(devaputrait) は、写本 T3.T4 には省略されており、チベット訳にも相当する訳語が見当たらないが、文脈上は、これが必要である。

<sup>20</sup> チベット訳には「蓮華を以て」(padmair) に当たる訳語はないが、方広には「以爲花臺」という訳語が見られる。

<sup>21</sup> チベット訳は「その道の右側と左側には」という意味の訳文になっている。

<sup>22</sup> 「七種の宝石」(七宝) とは、通常「金・銀・琉璃・頗黎（水晶）・砗磲（又は琥珀）・赤珠（珊瑚）・瑪瑙」をいう。『佛教語大辞典』587頁「七寶」参照。

<sup>23</sup> tāla は樹木の名（多羅樹）であるが、高さの単位としても用いられる。

<sup>24</sup> チベット訳は「矢の[届く] 距離・矢の距離ごとに」という意味の訳文になっている。

<sup>25</sup> チベット訳は「宝石で結ばれた全てのターラ樹は互いに繋がれて立ちたり」という意味の訳文になっている。

<sup>26</sup> 以上の蓮華名の原語は順に utpala, padma, kumuda, puṇḍarīka である。

<sup>27</sup> 以上の鳥名の原語は順に āḍī（水鳥の一種）、balāhaka（鶴の一種）、haṃsa, cakravāka, mayūra である。なお、チベット訳には「マユラ」の前に khruñ khruñ(= kroñca; 帝釈鳥)が挿入されている。

<sup>28</sup> 「天柱」(vyomaka) とは「天を支える」とみなされる柱の意である。方広には「妙臺」、普曜には「堞」の訳語が見られる。

<sup>29</sup> 「梅檀」の原語は candana、「沈水（香）」の原語は agaru である。

<sup>30</sup> kalānusārin は「白檀の一種」である。

<sup>31</sup> 「五千」の部分は、チベット訳には「五万」(līna khri) と訳されているが、方広には「五千天諸姝女」、普曜にも「五千玉女」とある。

えり。[また] 百千〔拘胝<sup>32</sup>〕の楽器が奏でられ、多量の花の大雨が降られ、百千の衣が打ち振られ、  
 260 百千の太鼓が<sup>たた</sup>敲かれ、馬・象・牡牛どもが<sup>ほうこう</sup>咆哮し、百千のシュカ（鸚鵡<sup>おうじ</sup>）・サーリカー（鵲<sup>くよく</sup>）  
 キラ（郭公<sup>かつこう</sup>）・カラヴィンカ（印度<sup>いん</sup>杜鵑<sup>どとぎす</sup>）・ジーヴァンジーヴァカ（共命鳥<sup>ぐみょうちよう</sup><sup>34</sup>）・ハンサ（鴛鴦<sup>がちょう</sup>）  
 ンチャ（帝釈<sup>たいしやく</sup>鳴<sup>しぎ</sup>）・マユーラ（孔雀<sup>くじやく</sup>）・チャクラヴァーカ<sup>35</sup>（鴛鴦<sup>おうじ</sup>）・【チャーシャ<sup>36</sup>（緑色の鵲<sup>くよく</sup>鳥）】が  
 右回りに旋回し、百千の吉祥物が奉獻せられたる、かくの如き種類の、この道路<sup>しやうこん</sup>の莊嚴を伴って、  
 菩薩は菩提道場に赴きたまえり。菩薩が菩提を証得せんと欲したところの夜、まさにその夜に、  
 ヴァンシャヴァルティン<sup>37</sup>（自在主）と名づける、三千大千〔世界〕の王たる梵天は、かの、梵天界  
 の大衆に呼びかけて、かくの如く言えり。「諸君、なにとぞ知られたし。ここに（今）〔一人の〕菩  
 薩摩訶薩ありて、彼は<sup>だい</sup>大甲冑<sup>かつしゅう</sup>にて武装し、偉大なる<sup>せいこん</sup>誓言<sup>しやくぎ</sup>を捨棄することなく、堅固なる<sup>けんこ</sup>鎧<sup>よろい</sup>に身を固  
 め、心に倦怠なく、一切の菩薩行を完成し、一切の<sup>はらみつ</sup>波羅蜜<sup>はらみつ</sup>の彼岸に達し、一切の菩薩地において自  
 在たるを得て、一切の菩薩意樂の儀軌をよく知り<sup>38</sup>、一切衆生の機根に随順し、如来のあらゆる秘  
 密處に正しく入り、マール（惡魔）のあらゆる業道<sup>ごうどう</sup>を超出し、一切の善根<sup>ぜんこん</sup><sup>39</sup>において他者に頼ること  
 なく<sup>40</sup>、一切の如来に加持せられ、一切衆生に解脱道を指し示す大商主<sup>41</sup>たる者、マール（惡魔）  
 の全領域を破壊する、三千〔大千〕〔世界〕の第一の勇者、一切の法薬を保有する大医王にして、  
 解脱の冠飾<sup>かんしよく</sup>を着けたる<sup>42</sup>大法王、智慧の大光明を放出する大旗幟<sup>だいきし</sup>の王、八世間法<sup>43</sup>に汚染せられざ  
 る大蓮華の如き者、一切法の陀羅尼を忘失せざる大海の如き者、貪愛と憎悪を滅除し、堅固にして  
 262 震動せしめられざること大須弥山<sup>だいしゆみせん</sup>の如き者、非常に無垢かつ甚だ清浄にして極めて明浄なる覚知を  
 有する〔が故に〕大寶珠（大摩尼宝）<sup>だいほうじゆ</sup>の如き者、一切法の自在者にして、心の調柔なること<sup>44</sup>大梵  
 天の如き者なり。〔かの〕菩薩は、マール（惡魔）の軍勢<sup>ぐんぶく</sup>を降伏せんがために、〔また〕無上正等覺  
 を証得せんと欲して、また、十力・〔四<sup>45</sup>〕無所畏・十八不共法を成満するために、大法輪を転ずる  
 ために、大獅子吼をとどろかせるために、法の布施によって一切衆生を満足せしめるために、一切  
 衆生の法眼を清浄ならしめるために、一切の外道異学を正法によって摧伏するために、過去の誓言

<sup>32</sup> 東大主要写本には「拘胝」(koṭi) が挿入されているが、チベット訳にはこれに当たる訳語がないので、削除すべきである。

<sup>33</sup> 「中巻」には「鵲」<sup>くよく</sup>と誤記したので「鸚鵡」に訂正する。鸚鵡（くよく）は「八哥鳥（はっかちょう）」とも呼ばれ、「体はむくどより少し大きく、黒色。よく人のことばをまねるので、飼い鳥とされる」（『新漢語林』「鸚鵡」の項目参照）。

<sup>34</sup> この鳥は「鸚鵡（しゃこ）」の一種とされるが、漢訳には「共命鳥」「命命鳥」などと訳される。「身は一つで頭は二つあり、心も二つあるという鳥」であり、「古来、人の顔をし、身体は鳥で、よい声を発するといわれる。実はインド北部の山地にすむ雉子の一種であるという」（『佛教語大辞典』274頁「共命鳥」参照）。

<sup>35</sup> 以上の鳥名の原語は順に śuka, sārīkā, kokila, kalaviṅka, jīvāṃjīvaka, haṃsa, kroñca, mayūra, cakravāka である。

<sup>36</sup> cāsa という鳥名は諸刊本になく、チベット訳にもこれに当たる訳語が見当たらないが、写本 T1, T4 には cāsa という語が挿入されている。

<sup>37</sup> vaśavartin は通常「他化自在天王」を指すが、ここでは一梵天の名とされている。

<sup>38</sup> チベット訳に従って「儀軌をよく知り」(su-vidhi-jñāḥ) と読むが、諸刊本によれば「極めて清浄であり」(suviśuddhaḥ) の意であり、方広にも「清浄意樂」との訳語が見られるので、この部分は「一切の菩薩意樂は極めて清浄であり」と訳すべきかもしれない。

<sup>39</sup> 「善根」(kuśala-mūla) とは「よい果報をもたらす善い行ない」「功德のもと（善の根）となる善行」を意味する。

<sup>40</sup> 「中巻」には「他者の縁に由らず」と誤したが、文意をより明確にするために、「他者に頼ることなく」に訂正する。

<sup>41</sup> 「商主」(sārthavāha) は「隊商（キャラヴァン）の長」の意であり、「大商主」は「偉大な指導者」の意味で用いられる。

<sup>42</sup> チベット訳は「解脱の方便を得たる」という意味の訳文になっている。

<sup>43</sup> 「八世間法」(aṣṭa-lokadharma) は「八世法」または「世八法」ともいう。「八世法」の内容については、第19巻第1号所載の拙訳（註76）を参照されたい。

<sup>44</sup> 「中巻」には karmaṇya-citto を「心が行動に適する〔が故に〕」と訳したが、「心の調柔なること」に訂正する。「調柔」(karmaṇya) とは「柔軟で適応能力のあること」である（『佛教語大辞典』760頁参照）。

<sup>45</sup> チベット訳には「四」に当たる訳語 (bshi) がある。

（本誓）<sup>46</sup>の成就を顕示するために、一切法における至上の自在力を得るために、菩提道場に赴きたまえり。それ故、諸君、汝らは、まさに菩薩への供養・奉仕の行為に対するあらゆる願望を<sup>おこ</sup>発せよ」[と]。

かくして、実には大梵天ヴァシャヴァルティンは、その時、次の偈頌を唱えたり。

1. その威光と福德と、また威徳によって、[彼の]梵道は明示されたり。

[彼の]慈・悲・棄・捨[の心]と、また、禪定と神通も[明示されたり]。

千劫[もの永き]にわたり勤修したる、彼は、菩提道場に出立したまえり。

いざ、かの牟尼が志願せる<sup>ごんかい</sup>禁戒の成就に対して、供養を<sup>な</sup>為されたし。

2. 彼に帰依すれば、悪趣の怖畏なく、無暇<sup>むじあ</sup><sup>47</sup>（災難）に陥ることもなし。

天界における望ましき安樂を得て、また広大な<sup>ぼんでんぐう</sup>梵天宮に到るべし。

彼（菩薩）は、六年間、苦行を勤修したるのちに、菩提樹に赴きたまう。

264 いざ、みな歡喜と喜悅の心を以て、彼への供養を為されたし。

3. 彼は三千[世界]の王にして、至上の支配者、法の自在主たる王者なり。

帝釈・梵天の都城、また月・太陽[の都城]にも、彼に等しき者は一人もなし。

彼が生まれたる時、拘胝尼由多<sup>こぢによた</sup> [もの多く]の国土が六種に震動せり。

彼は、今日、マール（悪魔）の軍隊に勝利すべく、無上の大樹に赴きたまう。

4. 彼の頭頂<sup>とうちよう</sup>は、この梵天界に立って[見て]も、見ること<sup>あた</sup>能わざるなり。

彼の身体は、非常に優美なる相好<sup>そうこう</sup>を具え、三十二相を以て装飾せられたり。

彼の言葉は、さても甘美かつ美妙にして耳に心地よく、美しき声<sup>ぼんおん</sup>の梵音<sup>ぼんおん</sup><sup>48</sup>なり。

彼の心は寂靜にして、憎悪を離れたり。彼の供養に[われらは]行くべし。

5. 帝釈・梵天の宮殿において、禪定<sup>ぜんじやう</sup>の樂を以て過ごさんとの意向を有する者、

あるいはまた、一切煩惱の繫縛<sup>けいばく</sup>の憂<sup>かづら</sup>たる、かの羅網を切断せんと欲する者、

他者より聴聞することなくして、安穩なる<sup>どっかく</sup>独覺<sup>ぼく</sup>菩提<sup>ぼだい</sup><sup>49</sup>の甘露<sup>かんろう</sup>を得んと望む者、

あるいは、もし三界における<sup>さんがい</sup>仏果<sup>ぶつ</sup><sup>50</sup>を欲する者あらば、その者は導師（菩薩）を供養すべし。

6. その[菩提の獲得の]ために、大海を含む大地や、また無数の宝石や、

多くの窓<sup>りやうぼう</sup>や涼房<sup>りやうぼう</sup>を有する高樓<sup>こうろう</sup>や、また車駕<sup>しやが</sup>（乗物）と[車駕を]牽く動物や、

非常に美しい花環に飾られた、園林・井戸・池を有する<sup>51</sup>国土や、

手・足・頭・眼などを捨施<sup>しへせ</sup>したる、彼は菩提道場に赴きたまえり。

かくして、実に比丘らよ、三千【大千<sup>52</sup>】[世界]の大梵天は、その刹那に、この三千大千世界を<sup>てのひら</sup>掌<sup>てのひら</sup>の如く平坦[なる世界]に変化せしめたり。瓦礫や砂利は除かれ、宝珠・真珠・琉璃・螺貝・

<sup>46</sup>「本誓（過去の誓言）」(pūrva-pratijñā) は、方広には「本願」と訳されている。

<sup>47</sup>「無暇（處）」(akṣaṇa) とは「不運：災難」の意であるが、「仏法を聴くことができない不運な境界」に八處ありとして、「八無暇（處）」と呼ぶ。「無暇處」については、第19巻第1号所載の拙訳（註123）を参照されたい。

<sup>48</sup>「梵音」とは「梵王（ブラフマン）の音声」の意味であるが、仏陀の「清らかな音声」をたたえていう。『佛教語大辞典』1270頁参照。

<sup>49</sup>「独覺菩提」(pratyeka-bodhi) とは「独覺仏（縁覺仏）の悟り」の意である。

<sup>50</sup>「三界における仏果」(buddhatvaṃ tribhuvane) とは「三界（全世界）において最も尊い仏陀の地位」を意味する。

<sup>51</sup>「園林・井戸・池を有する」の部分は、チベット訳では「園林によって美しく飾られた」という意味の訳文になっている。

<sup>52</sup>チベット訳には「大千」(mahāsāhasra) に当たる訳語が欠けているので、これを削除すべきか？

- 266 碧玉・珊瑚・銀・金に満ちて、[また] 青くて柔らかく、クンダラ（螺旋）の如く<sup>53</sup>右方に旋回し、ナンディアーヴァルタ<sup>54</sup>の形を成し、カーチリンディカ<sup>55</sup>衣の如く触れて心地よき草によって覆われたものへと、この大千世界を変化せしめたり。また、その時、一切の《大<sup>56</sup>》海は、[波浪なき]大地の如き[平静なる]ものに成り、しかも水棲の動物たちへの危害は全く生じることなかりき。まさに、かくの如く莊嚴に飾られたる、この世界を見て、十方の帝釈・梵天・護世王たちは、菩薩の供養のために、百千の仏国土を莊嚴に装飾したり。また、諸の菩薩によって、菩薩（釈迦牟尼）の供養のために、天界・人界をはるかに超出せる莊嚴なる諸供養を以て、十方の無数の仏国土が装飾せられたり。また、これら一切の仏国土は、種々の莊嚴なる装飾を以て飾られたるが故に、ひとつの仏国土の如くに見えたり。さらにまた、世界中間[の暗黒處]<sup>57</sup>・黒山<sup>58</sup>・[小]鉄囲山・大鉄囲山<sup>59</sup>等は、識別せられざりき<sup>60</sup>。また、これら一切の仏国土は、菩薩（釈迦牟尼）の光明によって、明瞭に見られたり。また菩提《道場<sup>61</sup>》を守護する十六名の天子あり。すなわちウトウカリンと名づける天子、また、ムトゥカリンと名づける天子、また、プラジャーパティ（生主）、シューラバラ（勇力）・ケーユーラバラ（脇環力）・スプラティシュティタ（善住）・マヒンダラ（持地）・アヴァバーサカラ（作光）・ヴィマラ（無垢）・ダルメーシュバラ（法自在）・ダルマケーツ（法幢）・シツダヤートラ（成就吉祥）・アプラティハタネートラ（無障眼）・マハーヴユーハ（大莊嚴）・シーラヴィシュッダガンダ（清浄戒香）・パドマプラバ<sup>62</sup>（蓮華光明）[と名づける天子たち]なり。かくの如き、これら十六名の、菩提《道場<sup>63</sup>》を守護する天子たちは、皆が、不退転の忍辱を得たる者なり。彼らは菩薩（釈迦牟尼）の供養のために、菩提道場を嚴飾したり。[すなわち、菩提道場の]周囲八十由旬まで、七重の《宝石の<sup>64</sup>》欄干によって囲まれ、七重のターラ樹の並木、七重の宝石の鈴網<sup>65</sup>、七重の宝石の紐によって囲まれたり。また、七種の<sup>66</sup>宝石によって象眼されたジャンブーナダ金（ジャンブー河産の黄金）の薄板と、金製の飾り紐と、ジャンブーナダ《金<sup>67</sup>》の蓮華によって蔽わ

<sup>53</sup> チベット訳には「クンダラの如く」に当たる訳語がない。

<sup>54</sup> nandīvārtā は吉祥なる図形の一つで「難提迦物多（または「難提迦勿多）」と音訳される。「もとはヴィシヌ神の毛髪の旋回するを意味するもの」とされる。『佛教大辞典』4756頁中段参照。

<sup>55</sup> kācilindika（迦旃隣陀）は水鳥の一種。その羽毛は細軟で、集めて織ると柔軟な衣服を作ることができるという（『佛教語大辞典』151頁参照）。方広には「迦陵陀衣」と音訳されている。

<sup>56</sup> 「大」（mahā）は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>57</sup> 「世界中間の處」については、第19巻第2号所載の拙訳115頁1~8行を参照されたい。

<sup>58</sup> 「黒山」とは「大鉄囲山と小鉄囲山の間の暗黒處」である（『佛教語大辞典』412頁参照）。

<sup>59</sup> 「鉄囲山」（cakravāḍa）とは「須弥山をめぐる鹹海（かんかい）の外を囲むと想像される山脈」である。鉄より出来ていと言われるが、cakravāḍaの意味は「車輪の円い縁」である。仏典には、しばしば cakravāḍa（[小]鉄囲山）と mahācakravāḍa（大鉄囲山）とが並記されている。岩本裕『日本佛教語辞典』（平凡社、1988年）530頁参照。

<sup>60</sup> 「識別せられざりき」（na prajñāyante sma）は、チベット訳には「見えなくなった」（mi snañ bar gyur to）と訳されている。

<sup>61</sup> 「道場」（maṇḍa）は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>62</sup> 以上の天子名の原語は順に utkharin, mutkharin, prajāpati, śūrabala, keyūrabala, supratīṣṭhita, mahindara, avabhāsakara, vimala, dharmesvara, dharmaketu, siddhayātra, apratihatanetra, mahāvīyūha, śīlasuddhagandha, padmaprabha である。方広にはこれらの天子名が順に「轉進」「無勝」「施與」「愛敬」「勇力」「善住」「持地」「作光」「無垢」「法自在」「法幢」「所行吉祥」「無障礙」「大莊嚴」「清浄戒香」「蓮華光明」と訳されている。

<sup>63</sup> 「道場」（maṇḍa）は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>64</sup> 「宝石の」（ratna）は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>65</sup> 「鈴網」は、チベット訳には「鈴・小鈴の網」（dril bu gyer kañi dra ba）と訳されている。

<sup>66</sup> 「七重の」（sapta）は、チベット訳には「一切の」（thams cad）と訳されている。

<sup>67</sup> 「金」（suvarṇa）は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

れたり。最高の樹脂の香料が焚かれ、宝石の網によって蔽われたり。また、十方の種々なる世界には、高貴にして<sup>68</sup>尊重される、天界や人界の様々な樹木が存在するが、それらの全てが、かの菩提道場に出現したり。また、十方〔の諸世界〕には、水生および陸生の、色々な種類の花が存在するが、それらも全て、かの菩提道場に出現したり。【また<sup>69</sup>】十方の種々なる世界における、無量なる福德と正智<sup>70</sup>の集積の莊嚴を以て菩提道場を裝飾せるところの菩薩たち<sup>71</sup>、彼らも、かの菩提道場に出現したり。

かくして、菩提道場を守護する天子たちによって、以上の如き莊嚴が菩提道場に化現せられたり。それらを見て、天神・竜・夜叉・乾闥婆《・阿修羅<sup>72</sup>》たちは、各自の宮殿が〔まるで〕墓地の如き〔貧弱な〕ものなりとの想いを生じたり。また、それらの莊嚴を見て、甚だ驚歎の念を抱きたり。そして、ウダーナ（感歎の句）を唱えたり、「善哉、福德の異熟（応報）の結果は、まことに不思議なり」と。また、四名の菩提樹神あり。すなわちヴェーヌ<sup>73</sup>（竹笛？）・ヴァルグ<sup>74</sup>（妙音）・スマナス<sup>75</sup>（善意）・オージョーパティ<sup>76</sup>（持精）なり。彼ら四名の菩提樹神は、菩薩の供養のために、〔次のような〕菩提樹を化現せしめたり。〔その菩提樹の〕根は隆盛にして幹も盛大なり、種々なる枝・葉・花・実が茂盛し、高さも大きさも円満具足し、美しく端正にして広大なり、八十ターラ<sup>77</sup>の高さありて、それにふさわしき太さあり、鮮麗にして見目麗しく魅力あり、宝石<sup>78</sup>の欄干によって七重に囲まれ、七重の、宝石のターラ樹の並木と、七重の、《宝石の<sup>79</sup>》鈴網<sup>80</sup>と、七重の、宝石の紐<sup>81</sup>とによって、あまねく囲まれて外辺が埋め尽くされ、パーリジャータカ・コーヴィダーラ<sup>82</sup>の如く、

<sup>68</sup> チベット訳には「高貴にして」の後に「清浄なる」（bzañ ba）が挿入されている。

<sup>69</sup> 「また」（ca）は東大主要写本には欠けているが、諸刊本はこれを挿入している。

<sup>70</sup> 「中巻」には jñāna を「智」と訳したが、「正智」に訂正する。

<sup>71</sup> これらの菩薩たちは、上記の「諸の菩薩によって、菩薩（釈迦牟尼）の供養のために、天界・人界をはるかに超出せる莊嚴なる諸供養を以て、十方の無数の仏国土が裝飾せられたり。」と記述されている場面における「諸の菩薩」を指していると思われる。

<sup>72</sup> 「阿修羅」（asura）は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>73</sup> veṇu は「竹」あるいは「笛」の意であるが、方広には「毘留」と音訳され、普曜には「足跡」と訳されている。

<sup>74</sup> valgu は「〔声の響きが〕美しい、愛らしい」の意であるが、方広には「薄瞿」と音訳され、普曜には「邊豆」と訳されている。

<sup>75</sup> sumanas は「善意」の意である。方広には「蘇摩那」と音訳され、普曜には「善意」と意訳されている。

<sup>76</sup> ojopati は「精力の持主」「精力の主」の意であるが、方広には「烏珠鉢底」と音訳され、普曜には「布精」と意訳されている。ただし、方広は最初の神名を「毘留薄瞿」として二名を結合して一名とし、「蘇摩那」を第二神の名、「烏珠鉢底」を第三神の名としており、第四に「帝珠」という神名を加えている。この場面では、普曜の記述のほうが梵文に合致しており、方広には誤解があるように思われる。

<sup>77</sup> チベット訳は「セターラ樹〔の高さ〕」という意味の訳文になっている。

<sup>78</sup> チベット訳は「七種の宝石」という意味の訳文になっている。

<sup>79</sup> 「宝石の」（ratna）は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>80</sup> 「鈴網」は、チベット訳には「鈴・小鈴の網」（dril bu gyer kañi dra ba）と訳されている。

<sup>81</sup> 「紐」（sūtra）は、チベット訳には「紐の輪」（brgyus pañi phreñ ba）と訳されている。。

<sup>82</sup> pārijātaka-kovidāra は「天界の如意樹」の名であるが、pārijātaka と kovidāra という二本の樹木名ではなく、「pārijātaka」という名の kovidāra 樹の意味と思われる。チベット訳には単に śiñ yoñs ḥdus brtol (= kalpa-druma: 劫樹；如意樹) と訳されている。BHSD(kovidāra の項) には「一つの森と見なしうるほどに大きな一本の樹木」との説明がある。また、中村元編著『図説佛教語大辞典』510頁「如意樹（kalpa-druma, kalpa-vṛkṣa, kalpa-taru）」の項には「インドラ神の天国にある五種の神樹の一つ。劫樹とも。ありとあらゆる願いをかなえるとされる。広義には、天界にある五種の樹の総称。すなわちマンダーラ、パーリジャータ、サンターナ、カルバヴリクシャ、ハリチャンダナを指す。如意樹は乳海攪拌の時、海から生じた」との説明があるので、これを参考にすれば、パーリジャータ〔カ〕とカルバヴリクシャ（＝カルバドゥルマ）を異なる如意樹の名と見ることできるし、あるいは広義の観点から、カルバドゥルマを「五種の樹の総称」と見ることできる。ここでは、kovidāra を五種の如意樹の総称と見なし、その中の pārijātaka(= pārijāta) という名の樹木を指していると考えることが可能である。

見る者の眼に「いつまでも」厭足を生じることなかりき。また、菩薩がそこに坐して菩提を證得せんと欲したところの、その地處は、三千《大千<sup>83</sup>》世界の金剛の臍（中心）たる、堅固なる中樞部なりて、[そこは]破壊せられざる金剛の自性を保持するものとなれり。

かくして、実に比丘らよ、菩薩が菩提道場に進みたまえる時、身体より、かくの如き類の光明が発散せられたり。[すなわち]その光明によって、一切の惡趣は鎮靜せられ、一切の無暇處<sup>84</sup>は断滅せられ、一切の惡道<sup>85</sup>の苦痛は枯渴せしめられたり。また、感官の不具なる衆生、彼らは感官を成満することを得たり。また、病人は病氣から解放せられ、<sup>86</sup>また、恐怖に脅かされたる者たちは安息を得たり。また、牢獄に繋がれたる者たちは牢獄より解放せられたり。また、貧窮せる衆生たちは財物を有するものとなれり。また、煩惱に焼かれたる者たちは熱惱なきものとなれり。また、飢えたる衆生たちは満腹することを得たり。また、渴ける者たちは渴きを癒されたり。また、妊婦たちは安樂に出産したり。老衰によって<sup>87</sup>脆弱なる者たちは力を具足するものとなれり。また、その時、いかなる衆生にも貪欲・瞋恚・愚癡・忿怒・愛著・敵意・惡意・嫉妬・慳貪<sup>88</sup>の苦惱は消失したり。また、その時、いかなる衆生も死ぬことなく、下生することなく、生まれることなかりき。また、その時、一切衆生は慈心《と利益心<sup>89</sup>》を有して、互いに父母に対するが如き想いを生じたり。そこで、かくの如く言われる。

7. 阿鼻<sup>90</sup>（無間地獄）に至るまでの、見るも無慘なる地獄の、  
衆生たちの苦惱は鎮まり、安樂を感じるを得たり。
8. 畜生[界]のあらゆる衆生たちは、互いに殺害し合えるも、  
大牟尼（菩薩）の光明に触れるや、彼らは慈心を生じたり。
9. 餓鬼界のあらゆる餓鬼どもは、飢渴に苦しめられたるも、  
菩薩の威光によって、彼らは飲食することを得たり。
10. 一切の無暇處は閉鎖せられ、諸の惡道も枯渴せしめられたり。  
一切衆生は安樂となり、天界の至福に満たされたり。
11. 眼や耳の欠けたる者、また、他の、感官の不具なる者たちは、  
一切の感官を具備し、一切の肢体が健全なるものとなれり。
- 274 12. 貪欲・瞋恚等の諸煩惱によって、常に<sup>91</sup>苦しめられたる衆生は、  
その時、一切の煩惱が鎮まりて、安樂に満ちたるものとなれり。
13. 狂氣の者たちは正念を得、また、貧窮せる者たちは財を得たり。

<sup>83</sup>「大千」(mahāsāhasra)は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>84</sup>「無暇處」については、上註47を参照されたい。

<sup>85</sup>「惡趣」(apāya)と「惡道」(durgati)は大体同一の概念であるが、六道輪廻と言うならば「地獄・餓鬼・畜生」を通常「三惡道」と呼ぶ。「惡趣」という場合には、三惡道に加えて阿修羅や人間・天上まで含めた六道輪廻の全体を含めることもある(『佛教語大辭典』19頁「惡趣」参照)。方広には、この場面で「地獄衆生・餓鬼衆生・畜生衆生」についての描写がある。

<sup>86</sup>チベット訳には、この箇所「全ての安穩たらざる者は安穩を得たり」という意味の一文が挿入されている。

<sup>87</sup>「老衰によって」(jirṇa)は、チベット訳には「臆病にして」(shum pa = dina)と訳されている。

<sup>88</sup>チベット訳には「慳貪」(mātsarya)に当たる訳語がない。

<sup>89</sup>「利益心」(hitacittāḥ)は東大主要写本には欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。「利益心」とは「他者の利益を願う心」である。

<sup>90</sup>「阿鼻」(avīci)は、間断なく苦痛を受けるので「無間地獄」とも呼ばれる。八大地獄の最下層に位置し、「諸地獄の中の最も苦しい場所」である。

<sup>91</sup>チベット訳には「常に」(sadā)に当たる訳語がない。



病気の者は病が治り、牢獄に繋がれた者たちは解放せられたり。

14. [衆生は互いに] 敵意なく、慳貪なく、また悪意も争論も、  
互に行使し合うことなく、その時、慈心を持って住したり。
15. 母や父、また一人息子に対して愛を起こすが如く、  
その如く、衆生は、その時、互いに子への如き愛情を生じたり。
16. 菩薩の光明網によって、周遍十方において、  
ガンガー<sup>92</sup>の砂の数に等しき、不可思議なる諸国土が照らし出されたり。
17. さらにまた、諸の鉄圍山も、諸の黒山も観見されず、  
これら、一切の広大なる諸国土は、一体で<sup>93</sup>あるかの如くに見えたり。
18. また[諸国土は] 掌の如く[平ら]になり、一切の宝石を蔵する<sup>94</sup>様が見られたり。  
菩薩の供養のために、一切の国土が装飾せられたり。
19. また、菩提道場に仕える十六名の天神たちも、同じく、  
[周囲] 八十由旬の範囲まで、菩提道場を嚴飾したり。
20. 拘胝もの[多くの]国土における、無限の<sup>95</sup>大莊嚴なところのもの、  
それら全ては、菩薩の威光によって、そこに出現したり。
21. 天神、竜、また、夜叉、緊那羅、及び摩睺羅迦の衆は、  
それぞれ自分の宮殿を、墓地の如き[貧弱なる]ものと想念せり。
22. この時、その莊嚴を見て、天神や人間たちは驚嘆したり。  
「善きかな、福德の果報たるやこれなり。その栄華たるや、かくの如し」[と]。
23. 身体と言葉、また心意によって、聊かも奮励することなきにも拘わらず、  
彼（菩薩）の意によって欲せられたる、一切の目的は成就せられたり。
24. それと同じく、他の諸願望も、かつて修行せる時に[すでに]成満せられたり。  
彼（菩薩）の業の成熟（果報）により、この、かくの如き栄華は生じたり。
25. 四名の菩提樹神によって菩提道場は嚴飾せられ、  
天界のパーリジャータ（如意樹）<sup>96</sup>の、それ[の崇高さ]よりも優れたり。
26. 天神たちによって造作せられたる、菩提道場の莊嚴なるものの、  
それらの特質の全てを、言葉によって説き尽くすことは不可能なり。

278 かくして、実に比丘らよ、菩薩の身体より発せられたる、その光明によって、カーリカ<sup>97</sup>竜王の宮殿は照らされたり。[その光明は] 清浄かつ無垢にして、身体と心を爽快ならしめ歓悦を生ぜしめ、一切煩惱を滅除し、一切衆生に安樂・歓喜・喜悦を生ぜしめる<sup>98</sup>ものなりき。さらにまた、カーリカ竜王は[それを]見て、その時、自らの眷属衆の前に立って、かくの如き偈を説けり。

<sup>92</sup> 「ガンガー」(gaṅgā) とは「ガンジス河」のこと。「ガンガーの砂」は「数量が多いことの比喩」として用いられる。

<sup>93</sup> 【中巻】には「ひとつで」と訳したが、「一体で」に訂正する。

<sup>94</sup> 【中巻】には「有する」と訳したが、「蔵する」に訂正する。

<sup>95</sup> 「無限の」(anantaka) は、チベット訳では「拘胝の国土」に掛かる修飾語として訳されている。

<sup>96</sup> 「如意樹」については、上註82を参照されたい。

<sup>97</sup> kālīka(kāla, kālaka) は竜王の名である。cf. BHSD(Kālīka).

<sup>98</sup> チベット訳は「衆生に、一切の歓喜・安樂・浄心・喜悦を生ぜしめる」という意味の訳文になっている。

27. クラクッチャンダ<sup>99</sup> (拘楼孫<sup>くろうそん</sup>仏)の時に、かくの如き美妙なる光明が見られ、  
またコーナー [ガマナ]<sup>100</sup> (拘那含<sup>くなん</sup>) という名の [仏]の 時にも見られたり。  
同じく、過失なき法王たるカーシュヤパ<sup>101</sup> (迦葉<sup>かしょう</sup>仏)の 時にも無垢なる光明が見られたり。  
疑いなく、最勝なる相好を有する利益者にして、智の光明を有する者が出現せり。  
それ故、この、わが宮殿は、実に、黄金<sup>おうごん</sup>の光明に飾られて輝けり。
28. この [わが] 住居においては、月・太陽の広大なる光明も見られず、  
また、火や宝珠の光明も、無垢なる電光、また星々の光明も [見られず]。  
あるいは、帝釈の光明や梵天の光明、また、阿修羅<sup>あしゅら</sup>の光明も [見られず]。  
以前の不善なる業の故に、わが住居はもっぱら黒暗<sup>くわん</sup>に覆われたり。
29. [されど] 今や、この宮殿の中は、太陽の光明によるが如く、清浄に輝けり。  
心には歓喜が湧き起こり、身体は安楽にして、四肢は清涼となれり。  
[わが] 身体の上には熱き砂が落ちきたれるも、それすら、われに清涼さを生じたり。  
幾多もの拘胝<sup>こてい</sup>の劫に修行したる者が菩提樹のもとに赴けるは明白なり。
- 280 30. 速やかに、竜 [の世界] の美妙にして優美なる花と、衣と芳香、  
また、真珠<sup>しんじゆ</sup>・瓔珞<sup>ようらく</sup>・装身具<sup>うでぐ</sup>・腕環<sup>まつこう</sup>などや、抹香<sup>くんこう</sup>や最上の薫香<sup>くんこう</sup>などを執れ。  
優雅なる太鼓<sup>たいこ</sup>や小鼓<sup>こづみ</sup>によって、様々<sup>さまざま</sup>の伎楽<sup>ぎがく</sup>や楽器の演奏をなせ。  
いざ<sup>102</sup>、われらは、一切世間に供養されるにふさわしき利益者の供養に赴かん。
31. 彼 [竜王] は起ち上がりて、竜女<sup>りゅうにょ</sup>たちとともに、四方を觀察せり。  
そして、メール山にも似たる、威光によって美しく飾られたる者 (菩薩) を見たり。  
拘胝<sup>てんじん</sup>もの天神・鬼神衆によって、また梵天の王<sup>きじん</sup><sup>103</sup>や夜叉<sup>や</sup>たちに囲まれてあり、  
[それらの衆は] 歓喜の心を以て彼 (菩薩) を供養し、「道はこれなり」と示したり。
32. かの竜王は歓喜し踊躍して、世間の最勝者 (菩薩) を供養し、  
[菩薩の] 両足<sup>うやうや</sup>に恭しく敬礼をして、牟尼<sup>むに</sup> (菩薩) の前に立てり。  
竜女たちも歓喜し、喜悦の心を以て牟尼の供養をなせり。  
[彼女らは] 諸の花・香料<sup>ずこう</sup>などを散らし、諸の楽器を演奏せり。
33. 竜王は大なる喜びを以て合掌し、[菩薩が] 真実の功德を有するが故に、讃歎<sup>さんだん</sup>せり。  
「導師<sup>どうし</sup>よ、世間の最勝者よ、満月の如き尊顔<sup>はいえつ</sup>を拝謁するは、あり難きかな。  
われは過去の諸仙 (過去仏) の瑞相<sup>ずいそう</sup>を見たりしも、御身にもまさにそれを見る。  
今日、御身はマーラ (悪魔) の軍勢<sup>ぐんせい</sup>を摧滅して、所願の地位を得たまわん。
- 282 34. そのために、往昔<sup>おうしやく</sup>、自制・布施 [行]・修養<sup>しゆよう</sup><sup>104</sup>に努め、全ての財を捨施したり。

<sup>99</sup> krakucchanda は「過去七仏」としては古いほうから四番目であるが、賢劫 (現在の劫) では最初 (第一番目) の過去仏である。

<sup>100</sup> konā (= koṇāgamana) は、賢劫における第二番目の過去仏である。

<sup>101</sup> kāśyapa は、賢劫における第三番目の過去仏であり、釈尊の直前に現れた仏陀である。

<sup>102</sup> 「いざ」 (hantā) は、チベット訳 [brduñ shin] によれば「[太鼓や小鼓を] 叩きながら」と訳すべきであるが、ここでは問投詞 hanta に同義とみて、「いざ」と訳す。

<sup>103</sup> 「梵天の王」 (brahmendra) は「梵天や帝釈 (インドラ)」と訳すことも可能である。

<sup>104</sup> saṃyama を「中巻」には「律義」と訳したが、「修養」に訂正する。「修養」とは「精神を練磨し、優れた人格を形成するようにつとめること」(『広辞苑』第六版参照) である。

そのために、自制・持戒・慈・悲<sup>105</sup>・忍辱力<sup>106</sup>を修習したり。

そのために、堅固なる精進と禪定とに専心し、智慧の燈火を熾したり。

御身の、それら一切の誓願は成就せられて、今日、勝者（仏陀）と成りたまわん。

35<sup>107</sup> 葉と花と実とをつけたる樹木が、菩提樹に向かってお辞儀をなせるが故に、

〔また〕水の満ちたる、千個もの瓶が〔御身を〕右繞なせるが故に、

椋鳥（カケス）の群が、歓喜に満ちて、甘美なる啼声を発するが故に、

ハンサやクローンチャの群が天空<sup>108</sup>を飛びながら、優美に舞いつつ、

楽しげに<sup>109</sup>仙人（菩薩）を右繞せるが故に、今日、御身は阿羅漢と成るべし。

36. 黄金の色に似たる妙光が、百もの（多くの）国土に達したるが故に、

また、悪趣は余すところなく鎮静せられ、生類は苦悩より解放されたるが故に、

月や太陽の宮殿には雨が降り、風も柔和に吹けるが故に、

今日、御身は、生と老とを度脱<sup>110</sup>せしめる、三界の商主と成りたまうべし。

37. 天神たちは愛欲の享樂を捨てて、御身の供養のために来集せるが故に、

また、梵天や梵輔天の神々は<sup>111</sup>、禪定の樂を放棄して来集せるが故に、

また、三界における最高の支配者たる者たちの全てがここに来集せるが故に、

今日、御身は、三界における生・老を度脱せしめる医王と成りたまうべし。

284 38. 今日、御身が進みたまうところの、その道は天神たちによって掃き清められ、

そこを通過して、クラクッチャンダ世尊も、カナカという名〔の世尊〕や、

カーシュヤパ〔世尊〕も進みたまいし故に、

また、純粹・無垢・清浄なる蓮華が大地を破って出現し、

そこに〔御身の〕力強き歩足が下ろされるが故に、今日、御身は阿羅漢と成るべし。

39. 幾千拘胝那由多もの、ガンジス河の砂に等しき〔数の〕マーラ（悪魔）たち、

彼らは御身を菩提樹の下から動かすことも、揺るがすことも能わざるべし。

色々な種類の、千那由多もの、ガンジス河の砂に等しき〔数の〕祭式が御身によって為され、  
世間の利益のために修行がなされたり。それ故に、今、〔御身は〕光り輝けり。

40. 星宿が月を伴って、〔あるいは〕星座もろともに太陽が、天空から地面に落ちようとも、

高壮なる大山が自らの座より動こうとも、あるいは、大海の水が涸れようとも、

誰か賢い者が、四大<sup>112</sup>の一つひとつを〔それぞれ個別に〕指し示すことができようとも、

<sup>105</sup>「慈」（maitra）とは「他者に樂を与えるようにつとめること」であり、「悲」（karuṇā）とは「他者の苦を除くようにつとめること」である。

<sup>106</sup>チベット訳には「忍辱」（bzod pa）とのみ訳され、「力」（bala）に当たる訳語はない。

<sup>107</sup>この偈は5行で一偈を成している。

<sup>108</sup>『中巻』には「虚空」と訳したが、「天空」に訂正する。

<sup>109</sup>sumanāḥを『中巻』には「好意をもって」と訳したが、「楽しげに」に訂正する。チベット訳には「清浄なる心をもって」（dañ baḥi yid kyis）と訳されている。

<sup>110</sup>「度脱」（mocaka）とは「解放し脱却させること」である。

<sup>111</sup>チベット訳では「梵天と梵輔天と天神たちは」という意味の訳文になっている。「梵天」とは「色界の初禪天」を指し、そこには「梵衆天」「梵輔天」「大梵天」の三天があるとされるが、普通には「大梵天」を「梵天」と呼ぶ。

<sup>112</sup>「四大」とは「一切の物質を構成する四大元素（地・水・火・風）」であり、「硬さを本質として保持する作用をもつ地大」「湿性をおさめ集める作用をもつ水大」「熱さを本質として成熟させる作用のある火大」「動物を生長させる作用のある風大」をいう（『佛教語大辞典』526頁参照）。

御身が樹王（菩提樹）の下に達したる後は、菩提を得ずして起つことはありうべからず。

41. 調御師よ、御身にまみえて供養をなし、また、功德を讃歎し、

菩提のために勧進<sup>113</sup>したるが故に、われには広大な利益の増進が得られたり。

一切の竜女とわれは、息子たち共ども、この出自（境涯）から脱することを得ん。

御身が、興奮せる象の歩調で進めるが如く、われらもその如くに進みゆくべし。

かくして、実に比丘らよ、カーリカ竜王の第一妃にして、スヴァルナプラヴァーサー<sup>114</sup>と名づける者あり。彼女は、種々の宝石の傘蓋を持ちたる、[また]種々の楽器を持ち、種々の真珠の瓔珞  
286 を持ち、種々の珠寶を持ち、種々の天界・人界の花鬘〔塗香<sup>115</sup>〕を持ち、種々の香炉を持ち、種々の楽器と伎楽を演奏せる、衆多<sup>116</sup>の竜女に圍繞され侍従せられて、[菩提樹へと]進みゆく菩薩に種々の宝石の花を散らしつつ、かくの如き偈を以て讃歎せり。

42. 動揺することなく、恐懼なく、臆病ならず、畏怖することなく、

怯弱ならず、憂愁なく、歓喜に満ち、摧伏し難く、

染著<sup>117</sup>なく、瞋恚なく、愚癡なく、貪著<sup>118</sup>することなく、

欲を離れ、繫縛を離れたる、大仙人よ<sup>119</sup>、貴方に帰命す。

43. [貴方は]とげを抜く医者、弟子を教導する者にして、

生類を諸の苦悩から度脱せしめる、優れた医者なり。

[生類が]休息處なく避難處なくして衰弱せるを知って、

貴方は、この三界に於ける休息處・避難處となれり。

44. 天神の群衆が浄心を生じ、喜悅して、

花の大雨を天空<sup>120</sup>より降らしめるが故に、

また、これらの者たちが大きな衣類を投げ散じるが故に、

今日、[貴方は]勝者（仏陀）に成るべし。大いに喜ばせたまえ。

45. 樹王（菩提樹）の下に赴きて、恐れることなく坐したまえ。

マーラ（悪魔）の軍を撃ち破り、煩惱の網を断除したまえ。

288 往昔の、かの<sup>121</sup>勝者王（仏陀）たちによって正覺せられたるが如く、

最も寂靜なる、無上の菩提を証得したまえ。

46. そのために、貴方が、幾拘胝もの劫に於いて、

生類を解脱せしめるために、苦行を為したまえる、

貴方の、その<sup>122</sup>願望は成就して、今や、時は来たれり。

<sup>113</sup>「勧進」とは「勧め励ますこと」である。

<sup>114</sup>suvarṇaprabhāsā は「黄金の輝き」の意。方広には「金光」と訳されている。

<sup>115</sup>「塗香」(vilepana) は全写本に記載されているが、チベット訳にはこれに当たる訳語がなく、文脈上も不要につき、削除すべきである。なお、「花鬘」(mālya-guṇa) とは「花環を編んだ紐」である。

<sup>116</sup>「衆多」とは「人数が多いこと」である。

<sup>117</sup>「染著」とは「心が外のものに染まって離れず、愛著すること」である。

<sup>118</sup>「貪著」とは「食欲にむさぼり求めること」である。

<sup>119</sup>チベット訳には「大」に当たる訳語がなく、単に「仙人よ」(draṇ sroṇ) と訳されている。

<sup>120</sup>「中巻」には「虚空」と訳したが、「天空」に訂正する。

<sup>121</sup>チベット訳には「かの」(tair) に当たる訳語がない。

<sup>122</sup>チベット訳には「その」(sa) に当たる訳語がない。

樹王（菩提樹）の下に赴きて、無上の菩提を獲得したまえ。

さて、その時、比丘らよ、菩薩にかくの如き思念が生じたり。「彼ら、往昔の如来たちは、いかなる座に坐して、無上正等覺を証得したりしや」と。それから、彼にかくの如き思念が生じたり。「草の座に坐したまえり」と。

その時実には、空中に立てる、百千の、淨居天に属する天神たちが、菩薩の心の所念を、まさに心によって了知して、かくの如き言葉を告げたり。「その通り、善士よ、その通りなり。善士よ<sup>123</sup>、草の座に坐して、彼ら、往昔の如来たちは無上正等覺を証得したまえり」[と]。

実にまた、比丘らよ、菩薩は、道の右側に、草壳人のスヴァスティカ<sup>124</sup>（吉祥）が草を刈れるを見たり。[その草は]青く、柔らかく、天天<sup>125</sup>として、愛らしく、螺旋状に渦巻き、右方に旋回し、孔雀の頸の如くにして、カーチリンディカ<sup>126</sup>衣の如く触れて心地よく、芳香あり、妙色を有し、艶やかなりき。[それを]見て、また、菩薩は道から逸れて、草壳人スヴァスティカのいるところに行き、近づきて、草壳人スヴァスティカに美妙なる言音を以て話しかけたり。その言音は、論すが如く、勧告するが如く、分明にして、音節に滞りなく、音調《楽しく<sup>127</sup>》、美妙にして、聴聞に値し、情愛深く、記憶せしめ、鼓舞し、満足せしめ、悦樂を生ぜしめ、粗暴ならず、吃音なく、荒々しからず、輕佻ならず、円滑にして、魅力あり、耳に快く、心身を大いに勇躍たらしめ、貪欲・瞋恚・愚癡・鬬諍・汚穢を滅除せしめ、カラヴィンカ鳥<sup>128</sup>の啼声の如く、クナーラ鳥<sup>129</sup>・ジークヴァンジーヴァカ鳥<sup>130</sup>などの囀りの音響の如く、太鼓と伎楽の演奏の音響を有し、遍悩せしめることなく、誠実にして、清明なり、真正にして、梵音声の音響の如く、海鳴りの勢威に似たる、擦れ合う山の如き音響あり、天神の主や阿修羅の主にも讃歎せられ、甚深にして、測り難く、ナムチ（悪魔）の軍勢を無力ならしめ、外道異学の説を論破し、獅子吼の威勢あり、馬や象が嘶く声の如く、竜の雄叫びの如く、雷鳴の轟く音の如く、十方の一切仏国土に遍くゆきわたり、教化さるべき衆生を勧発し<sup>131</sup>、まごつくことなく、苛々させることなく、遲滞なく、適切なり、理路整然として、時宜に適って話し、好機を逸することなく、百千の法がよく編み込まれ、心地よく、執著を離れ、中断することなき弁才を有し、一音を以て一切音を發し、全ての意向を知らしめ、あらゆる安樂を生ぜしめ、解脱道を開示し、正道の資糧を説示し、大衆を超絶することなく、一切大衆を満足せしめ、一切の仏陀の所説に隨順<sup>132</sup>するものなりき。[以上]かくの如き言音を以て、菩薩は草壳人スヴァスティカに偈によって呼びかけたり。

<sup>123</sup> チベット訳には、この箇所の「善士よ」(satpuruṣa)に当たる訳語がない。

<sup>124</sup> svastika は草壳人の名であり、方広も普曜も「吉祥」と訳している。

<sup>125</sup> 「天天」とは「若々しく美しいさま」を表す語である。

<sup>126</sup> 「カーチリンディカ」については、上註55を参照されたい。方広のこの場面には「迦尸迦衣」との訳語が見られる。

<sup>127</sup> 「楽しく」(sukhā) は東大主要写本に欠けているが、文脈上もチベット訳によっても、これを挿入すべきである。

<sup>128</sup> kalaviṅka (迦陵頻伽) は「ヒマラヤ山中にいる美声の鳥で、卵殻の中にいる時、すでによく鳴き、その声を聞く者はあきることがないという」。『佛教語大辞典』152頁参照。

<sup>129</sup> kunāla (= kuṇāla : 鳩那羅) も鳥の一種で、その眼が清冷なることから「好眼鳥」とも訳される。

<sup>130</sup> jivamjivaka も鳥の名で、「命命鳥」「共命鳥」等と訳される。「身は一つで頭は二つあり、心も二つあるという鳥」で、「よい声を発するといわれる」。『佛教語大辞典』274頁参照。

<sup>131</sup> チベット訳は「教化さるべき一切の衆生を満足せしめ」という意味の訳文になっている。なお、「勧発」とは「人に勧めて道心を起こさせること。激励すること」である（『佛教語大辞典』192頁参照）。

<sup>132</sup> 「隨順」とは「したがって適合すること」である。

- 292 47. 「スヴァステイカよ、速やかに、われに草を与えよ。  
 今日、われには、草によって、いとも大なる利益があるべし。  
 ナムチ（悪魔）を軍勢もろともに滅ぼして、  
 無上の、安穩なる菩提を証得せん。
48. そのために、われは、千劫にわたり、  
 布施、自制、また、律義、<sup>きしつ</sup>棄捨、  
 持戒、<sup>こんかい</sup>禁戒、また、<sup>こんしつ</sup>苦行を勤修したり。  
 われは、今日、それ（菩提）を証得すべし。
49. <sup>にんにくりき</sup>忍辱力、また、<sup>しょうじんりき</sup>精進力、  
<sup>ぜんじょうりき</sup>禪定力、また、<sup>しょうちりき</sup>正智力<sup>133</sup>、  
 また、<sup>ふくとく</sup>福德・<sup>じんずう</sup>神通・<sup>げだつりき</sup>解脫力、  
 それらの完成が、今日、われに生ずべし。
50. <sup>ちよりき</sup>智慧力、また、<sup>ほうべんりき</sup>方便力、  
<sup>じんずうりき</sup>神通力<sup>134</sup>、また、<sup>しょうげ</sup>障礙なき慈の力、  
 [四] <sup>むげべん</sup>無礙辯<sup>135</sup>、また、<sup>しんじつりき</sup>真実力<sup>136</sup>、  
 それらの完成が、今日、われに生ずべし。
51. 今日、われに草を与えるならば、  
 汝の福德力もまた、無量とならん。
- 294 これは、汝の悪徳の原因を生ずることなく、  
 汝もまた、無上なる師（仏陀）と成るべし。」
52. スヴァステイカは、導師（菩薩）の優美にして美妙なる言葉を聞くや、  
<sup>ゆやく</sup>歡喜し、<sup>きんかい</sup>踊躍し、喜悅し、欣快を生じたり。  
 柔軟・新鮮・美麗にして、感觸のよい草を手一杯に持ち、  
 [菩薩の] 前に立ち、<sup>きんきじやくやく</sup>欣喜雀躍として<sup>137</sup>、言葉を述べたり。
53. 「もし草ごときによって、不死にして至高の地位たる菩提、  
 最高の寂靜にして見難き、<sup>み がた</sup>往昔の勝者（仏陀）の道が得られるならば、  
 《大<sup>138</sup>》功德の海たる者よ、<sup>おうしやくしやうしや</sup>名声無辺なる者よ、貴公は《しばらく<sup>139</sup>》待たれよ。  
 われこそ、まず最初に、不死なる至高の地位を証得せん。」
- 【菩薩は告げたり。<sup>140</sup>】

<sup>133</sup>「中巻」には「智力（理解力）」と訳したが、「正智力」に訂正する。チベット訳によれば「智慧力」（prajñā-bala）であるが、この語句は次の偈に再出するので、「正智力」（jñāna-bala）と読むべきである。

<sup>134</sup>ṛddhi を、「中巻」には「威神力」と訳したが、「神通力」に訂正する。

<sup>135</sup>「四無礙辯」とは「四種の（自由自在で）障りのない理解表現能力」の意であり、「法無礙」「義無礙」「辞無礙」「樂説無礙」に分類される。【佛教語大辞典】532頁参照。

<sup>136</sup>「中巻」には「真実の力」と訳したが、「真実力」に訂正する。「真実力」とは「真実を語る能力」であり、「真実を語ることから生まれる説得力」を意味すると思われる。

<sup>137</sup>「中巻」には「喜悅の心をもって」と訳したが、「欣喜雀躍として」に訂正する。

<sup>138</sup>「大」（mahā）は東大主要写本に欠けているが、韻律上もチベット訳によっても挿入すべきである。

<sup>139</sup>「しばらく」（tāva[= tāvat]）は東大主要写本に欠けており、チベット訳にもこれに当たる訳語がないが、韻律上これが必要である。

<sup>140</sup>【 】内の部分は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

54. 「スヴァステिकाよ、種々の困難なる禁戒・苦行を多劫に為すことなくして、  
 [ただ] 端麗なる草の座によって、この菩提が得られるにはあらず。  
 覚知を有し、智慧・福德・方便に卓出せる者と成りたる、その後、  
 勝者たる牟尼（仏陀）によって『[汝は] 塵垢なき者に成るべし』との授記が為される。
55. スヴァステिकाよ、もし、この菩提を他の者に与えることができるならば、  
 有情（衆生）を一団となして[われは] 与えるべし。汝は疑念を持つべからず。  
 われが菩提を証得して、甘露の分与が為されると汝が知りたる<sup>141</sup>、その時に、  
 来たりて、説法を<sup>142</sup>聴聞すれば、汝は塵垢なき者と成るべし。」
56. 導師（菩薩）が、この上なく柔軟なる草を、手一杯に受け取って、  
 獅子か鷲鳥の如き歩調を以て進みゆけば、大地は震動したり。  
 天神と竜の群衆は、喜悅の心を以て合掌せり。  
 「今日、この方はマーラ（悪魔）の軍勢を撃破して、甘露を得たまわん」[と]。

かくして、実に比丘らよ、菩薩が菩提樹に近づきつつある時に、八万本の菩提樹が諸天子と諸菩薩によって莊嚴に飾られたり。「菩薩はここに坐して菩提を得、正等覺を証得したまわんことを」と[各自が同様に考えて]。そこにおいて、いくつかの菩提樹は花の自性を有し、百千由旬の<sup>143</sup>高さを有したり。いくつかの菩提樹は香の自性を有し、百千由旬の<sup>144</sup>高さを有したり。いくつかの菩提樹はチャンダナ（栴檀）の自性を有し、百千由旬の高さを有したり。いくつかの菩提樹は衣の自性を有し、高さは五百千（五十万）由旬なりき。いくつかの菩提樹は宝石の自性を有し、高さは十百千（百万）由旬なりき。いくつかの菩提樹は《あらゆる<sup>145</sup>》宝石の自性を有し、高さは[十<sup>146</sup>]百千拘胝那由多由旬なりき。[いくつかの菩提樹は宝石の自性を有し、百千拘胝那由多の高さありき。<sup>147</sup>] また、これら全ての菩提樹の下には、それぞれにふさわしき、天界の種々なる更紗の敷かれたる師子座<sup>148</sup>が設けられたり。ある菩提樹の下には蓮華の座が設けられたり。ある[菩提樹の]下には香の座が、ある[菩提樹の]下には色々な種類の宝石の座が[設けられたり]。また、菩薩はラリタヴユーハ<sup>149</sup>（遊戯莊嚴）と名づける三昧に入定したり。また、菩薩が、このラリタヴユーハ【と名づけるところ<sup>150</sup>】の菩薩三昧に入定するやいなや、その時、まさにその刹那に、それら一切の菩提樹下の師子座に、諸相隨好<sup>151</sup>に美しく飾られた身体をもって坐せる菩薩が出現したり。そして、

<sup>141</sup> チベット訳には「汝が知りたる」(jānase) に当たる訳語がない。

<sup>142</sup> 「説法を」の部分は、チベット訳には「最勝なる法を」という意味の訳文になっている。

<sup>143</sup> チベット訳は「百由旬の」という意味の訳文になっている。

<sup>144</sup> チベット訳は「千由旬の」という意味の訳文になっている。高さが順に高くなる表現技法であれば、チベット訳がオリジナルな文意を伝えていられると思われる。

<sup>145</sup> 「あらゆる」(sarva) は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>146</sup> チベット訳には「十」(daśa) に当たる訳語がなく、文脈上も削除すべきである。

<sup>147</sup> [ ] 内の部分は直前の箇所と重複する表現となっており、チベット訳にもこれに相当する訳文は見当たらないので削除すべきであるが、多くの写本がこれを挿入している。

<sup>148</sup> 「師子座（獅子座）」とは「仏の座席」の意。「獅子が百獣の王であるように、仏も一切の者の王者であるから、人間の中での獅子である」とい、その座所を師子座という」（『佛教語大辞典』544頁参照）。

<sup>149</sup> lalitavyūha は「莊嚴なる遊戯」の意である。方広には「方廣神通遊戯大嚴」、普曜には「淨耀」と訳されている。

<sup>150</sup> 「名づける」(nāma) は東大主要写本に欠けており、チベット訳にもこれに当たる訳語がないから、【 】内の部分は削除すべきかもしれない。

<sup>151</sup> 「諸相隨好」とは、三十二相と八十種隨好とを合わせた「大人の相」を指す。

〔師子座を設けたる〕それぞれの菩薩たちは、天子たち共ども<sup>152</sup>、かくの如く考えたり。「まさに、私の〔設けたる〕師子座に菩薩は〔三昧に〕入定して坐したるにして、他者の〔座に坐する〕にはあらず」と。また、このラリタヴユーハなる菩薩三昧の威神力によって、一切の地獄・畜生・ヤマの世界<sup>153</sup>（餓鬼道）、一切の天神と人間、また、あらゆる境界（再生の場所）に生まれたる一切の衆生が、菩提樹下に坐せる菩薩〔の姿〕を見たり。

然りといえども、さらに、低劣なるものを信解<sup>154</sup>せる衆生たちの心を満足せしめるために、菩薩は手一杯の草を取って、菩提樹へと近づき来たり。近づきて、菩提樹を七回右繞<sup>うにょう</sup>して、まさに自ら〔草の〕先端を内側に向け根元を外側に向け、全面にわたって美しき草の座を敷き、獅子の如く、勇者の如く、力ある〔者の〕如く、堅固なる〔者の〕如く、精進ある〔者の〕如く、威勢ある〔者の〕如く、象<sup>155</sup>の如く、自在主の如く、自存者の如く、智者の如く、無上なる〔者の〕如く、卓越せる〔者の〕如く、超出せる〔者の〕如く、名声ある〔者の〕如く、名誉ある〔者の〕如く、布施〔者の〕如く、持戒〔者の〕如く、忍辱〔者の〕如く、精進〔者の〕如く、禪定〔者の〕如く、智慧〔者の〕如く、正智<sup>156</sup>ある〔者の〕如く、福德ある〔者の〕如く、魔賊<sup>まぞく</sup>を摧伏<sup>さいふく</sup>せる〔者の〕如く、資糧<sup>しりょう</sup><sup>157</sup>（善根・功德）ある〔者の〕如く、結跏趺坐<sup>けっかふざ</sup>して、その草の座に東方を向いて坐し、身体をまっすぐに伸ばし、心念<sup>しんねん</sup><sup>158</sup>を現前に生ぜしめて、かくの如き堅固なる誓いを為したり。

57. この座において、われの身体が枯れようとも、  
また、皮・骨肉が朽ち果てようとも、  
多劫において得難き菩提を、得ずしては、  
この座より、身体を決して動かさざるべし、と。

〔以上〕「菩提道場往詣品」と名づける第19章なり。

<sup>152</sup> チベット訳は「菩薩と天子は、それぞれの心中に」という意味の訳文になっている。

<sup>153</sup> 「ヤマ（閻魔）の世界」（yama-loka）は、ここでは文脈上「地獄」ではなく「餓鬼」を指すと考えられる。

<sup>154</sup> 「信解」とは「教法を確信して了解すること」である（『広辞苑』第六版参照）。

<sup>155</sup> nāga は通常「龍（竜）」の意味であるが、ここではチベット訳 [glañ po] を参考に「象」と訳す。

<sup>156</sup> 「中巻」には jñāna を「智（理解力）」と訳したが、「正智」に訂正する。

<sup>157</sup> 「資糧」（sambhāra）とは「修行の基本となる善根・功德の集積」を意味する。

<sup>158</sup> 「中巻」には smṛti を、方広を参考に「正念」と訳したが、「心念」に訂正する。「心念」とは「心に堅く保持する想念」の意である。



第20章（菩提道場莊嚴品）<sup>159</sup>

302 かくして、実に比丘らよ、菩薩が菩提道場に坐せる時、東の方向に、六欲界<sup>160</sup>の天神たちが立てり。「誰も菩薩に障礙<sup>しょうがい</sup>を為すことのなきように」と。同じく、南・西・北の方向も、天神たちによって警護せられたり。

かくして、実に比丘らよ、菩薩は、菩提道場に坐せる、その時に、「菩薩の勸発<sup>かんぱつ</sup><sup>161</sup>」と名づける光明を発したり。その光明により〔勸発せられたる<sup>162</sup>〕、周遍十方の無量・無数の、法界<sup>はっかい</sup><sup>163</sup>を究極とする虚空界<sup>こくう</sup><sup>164</sup>の果てに至るまでの、一切の仏国土が照らされたり。その時実、東方のヴィマラ（無垢）世界におけるヴィマラプラヴァーサ<sup>165</sup>（無垢光明）如来の仏国土から、ラリタヴユーハ（遊戯莊嚴）<sup>166</sup>と名づける菩薩摩訶薩が、その光明に勸発されて、夥しい数の菩薩たちに圍繞され、侍従せられて、菩提道場へ、また菩薩のところへと近づき来たり。来たりて、また、その時、《菩薩の供養のために<sup>167</sup>》かくの如き種類の神通変化を造作したり。〔すなわち〕その神通変化を造作することによって、十方における虚空界の辺際<sup>へんさい</sup>に達するまでの、一切の仏国土は、清浄なる青瑠璃に

304 よって造られた一つの講堂として示され、五道<sup>ごどう</sup><sup>168</sup>に生まれた一切衆生の前に、菩提道場に坐したる菩薩が示現せられたり。そこで、それらの衆生は互いに一つの指で菩薩を指し示し合えり。「かくの如く優美なる、この衆生は誰か。かくの如く光輝ある、この衆生は誰か」と〔言いながら〕。また、それらの衆生の前に、菩薩は<sup>169</sup>諸の菩薩〔衆〕を化作したまえり。そこにおいて、それら化身の菩薩たちは、次の偈を説けり。

1. その人の、残り僅かな貪欲・瞋恚・垢穢は、習氣<sup>じっけ</sup><sup>170</sup>とともに拔徐せられ、

その人の身体より光明が発せられるや、十方の一切光明は光輝なきものとなれり。

その人の福德・三昧・正智の集積は、多劫において増大せられたり。

まさにその、最勝の大牟尼たる釈迦牟尼が、あらゆる方向を照らしたり。

それからまた、南方のラトナヴユーハ<sup>171</sup>（宝莊嚴）世界のラトナールチス<sup>172</sup>（宝焰）如来の仏国土

<sup>159</sup> 方広には「嚴菩提道場品」と訳されている。

<sup>160</sup> 「六欲界」とは、三界（欲界、色界、無色界）のうち欲界に属する六種の天（六欲天）を指す。すなわち「四大王天」「三十三天」「夜摩天」「兜率天」「化乐天」「他化自在天」の六天界である。

<sup>161</sup> 「菩薩の勸発」（bodhisattva-saṃcodanī）は、方広には「開發菩薩智」、普曜には「班宣道場」と訳されている。

<sup>162</sup> 「勸発せられたる」（saṃcoditaḥ）は、東大主要写本には挿入されているが、チベット訳には相当する訳語がなく、文脈上も不要なので削除すべきである。

<sup>163</sup> ここにおける「法界」（dharma-dhātu）は「真理（法）の根源」「事物の根源」を意味する大乘仏教の用語と考えられる（『佛敎語大辞典』1249頁参照）。なお、『広辞苑』（第六版）の「法界」の項には「①思考の対象となる万物、②真理のあらわれとしての全世界」との説明がある。

<sup>164</sup> チベット訳には「界」（dhātu）に当たる訳語がない。

<sup>165</sup> vimalaprabhāsa は「無垢なる光明」の意。方広には「離垢光明」、普曜には「無垢光」と訳されている。

<sup>166</sup> lalitavyūha は「遊戯莊嚴」の意であるが、チベット訳には「安樂莊嚴」（bde ba bkod pa）と訳されている。方広には「遊戯莊嚴」、普曜には「耀嚴光」と訳されている。

<sup>167</sup> 《 》内の原文は東大主要写本には欠けているが、チベット訳にはこれに当たる訳文があるので、挿入すべきである。

<sup>168</sup> 「五道」とは、六道輪廻の六界（地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天）から「阿修羅」を除いた五界である。

<sup>169</sup> チベット訳は「かの菩薩は」という意味の訳文になっている。

<sup>170</sup> 「習氣」（vāsanā）とは「煩惱そのものは尽きてしまっても、その後に残っている潜在的習慣性」「業の潜在余力」を指す。

<sup>171</sup> ratnavyūha は方広には「寶莊嚴」、普曜には「最浄」と訳されている。

<sup>172</sup> ratnārcis は「宝の焰」の意。方広には「光明」、普曜には「寶焰」と訳されている。

から、ラトナチャットラクータサンダルシャナ<sup>173</sup>（示現宝蓋樓<sup>じげんぼうがいうろう</sup>）と名づける菩薩摩訶薩<sup>ぼさつまかさつ</sup>が、その光明に勧発されて、夥しい数の菩薩たちに圍繞され侍従せられて、菩提道場へ、また菩薩のところへと近づき来たり。来たりて、菩薩の供養のために、一つの宝石の傘蓋によって、その講堂の全体を覆えり。そこにおいて、帝釈・梵天・護世〔四天〕王たちは、互いにかくの如く言えり。「これは誰の果報にして、何のために、この、かくの如き種類の莊嚴なる<sup>174</sup>宝石の傘蓋は出現したるや」

306 [と]。その時、その宝石の傘蓋より、次の偈<sup>げんしゆつ</sup>が現出したり。

2. その人によって、宝石および香の、千拘胝那由多もの〔多くの〕傘蓋が、

無比なる者たちや涅槃に住する者たちに、慈心を以て捧げられたり<sup>175</sup>。

彼こそまさに、最勝なる相好<sup>そうこう</sup>を有する利益者<sup>りやくしや</sup>にして、那羅延力<sup>ならえんりき</sup><sup>176</sup>を具有せり。

〔かの〕具徳者<sup>ぐとくしや</sup>は菩提〔樹〕の根元に赴けり。彼のために、この供養は為されたり。

それからまた、西方のチャンパカヴァルナー<sup>177</sup>（詹波花色<sup>せんぱかしき</sup>）世界のプシュパーヴァリヴァナラージサンスミタービジュニヤ<sup>178</sup>（花條森花列満開神通）如来の仏国土から、インドラジャーリー<sup>179</sup>（因陀羅網<sup>いんだらもう</sup>）と名づける菩薩摩訶薩が、その光明に勧発されて、夥しい数の菩薩〔摩訶薩<sup>180</sup>〕たちに圍繞され侍従せられて、菩提道場へ、また菩薩のところへと近づき来たり。来たりて、また、菩薩の供養のために、その講堂全体を、一つの宝石の網によって覆えり。その時、十方の天神・竜・夜叉・乾闥婆<sup>ガンダルヴァ</sup>たちは、互いにかくの如く言えり。「この、かくの如き種類の光明の莊嚴は誰のものか」

308 [と]。その時、その宝石の網より、次の偈<sup>げんしゆつ</sup>が現出したり。

3. 宝の蔵、宝の旗、三界（全世界）の喜び、

無上の宝にして、宝の名声ある、彼（菩薩）は法を喜べり。

精進<sup>しょうじん</sup>を獲得して、三宝<sup>さんぼう</sup><sup>181</sup>（仏・法・僧）を断絶せしめざる、

彼は無上の菩提を得たまわん。これは彼への供養なり。

それからまた、北方のスールヤーヴァルター<sup>182</sup>（日転）世界のチャンドラスールヤジフマカラナ

<sup>173</sup> ratnachattrakūṭasamdarśana は「宝石の傘蓋の樓閣を示現する」の意。方広には「現寶蓋」、普曜には「現寶積蓋」と訳されている。

<sup>174</sup> 「中巻」には、不注意によって「莊嚴なる」(vyūha) という訳語が欠落しているので、これを補足する。

<sup>175</sup> チベット訳は「慈心を以て、無比なるものに住する者や涅槃せる者に与えられたり」という意味の訳文になっている。

<sup>176</sup> 「那羅延」(nārāyaṇa) は「天上界の力士」(大力を有する神)の意であり、ヒンドゥー教の最高神格であるヴィシュヌの異称とされる。

<sup>177</sup> campakavarṇā は「チャンパカ樹の色」の意。チャンパカ樹は「黄色の芳香ある花を咲かせる高大な樹の一種」であり、「黄花樹」「金色華樹」などと漢訳される（『佛教語大辞典』946頁参照）。この場面の方広には「詹波」、普曜には「思夷像」と訳されている。

<sup>178</sup> puṣpāvalīvanarājisaṃkusumitābhijña は「花の枝條や林木の列が満開に咲く神力」の意。方広には「開敷花王智慧神通」、普曜には「華嚴神通」と訳されている。

<sup>179</sup> indrajāli は「インドラ（因陀羅）の網」の意。方広には「寶網」、普曜には「無著光明」と訳されている。

<sup>180</sup> 「摩訶薩」(mahāsattvaih) は、東大主要写本には挿入されているが、チベット訳には相当訳語がなく、文脈上も不要なので削除すべきである。

<sup>181</sup> 「三宝」とは「仏教を構成する三つの大切な要素」であり、「悟りを開いた人（仏）」と「仏の教え（法）」と「その教えを受けて修行する集団（僧）」から成る。

<sup>182</sup> sūryāvartā は「太陽が転ずる」の意。方広にも普曜にも「日轉」と訳されている。

プラバ<sup>183</sup>（覆蔽日月光）如来の仏国土から、ヴューハラージャ<sup>184</sup>（莊嚴王）と名づける菩薩摩訶薩が、その光明に勧発されて、夥しい数の菩薩たちに圍繞され侍従せられて、菩提道場へ、また菩薩のところへと近づき来たり。来たりて、菩薩の供養のために、十方の、一切世界における仏国土の、あらゆる功德莊嚴の、それら全てを、その講堂に示現したり。その時、ある菩薩たちはかくの如く言えり。「この、かくの如き種類の莊嚴は誰のものか」[と]。その時、それら一切の莊嚴より、次の偈が現出したり。

4. その人により、数限りなく、福德や正智によって身業<sup>じょうしゅ</sup>が浄修せられ、  
その人により、<sup>こんかい</sup>禁戒・苦行、また真実の法によって語業が浄修せられ、  
その人により、<sup>ざんち</sup>慚恥<sup>186</sup>と決意、また悲心と慈心によって意業が浄修せられたり。  
まさに、その、樹王下に赴ける釈迦族の牡牛たる者が供養せられたり。

それからまた、東南の方角のグナーカラー<sup>187</sup>（功德藏）世界のグナラージャプラバーサ<sup>188</sup>（功德王光明）如来の仏国土から、グナマティ<sup>189</sup>（功德慧）と名づける菩薩摩訶薩が、その光明に勧発されて、  
310 夥しい数の菩薩たちに圍繞され侍従せられて、菩提道場へ、また菩薩のところへと近づき来たり。来たりて、菩薩の供養のために、一切の功德莊嚴を有する樓閣を、その講堂に化作したり。【彼（グナマティ菩薩摩訶薩）の、かの従者たちは、かくの如く言えり。「この、かくの如き種類の樓閣の莊嚴は誰のものか」[と]。】<sup>190</sup> また、その樓閣から、次の偈が現出したり。

5. その人の功德によって、天神・阿修羅・夜叉・摩睺羅迦たちは、  
常に、功德の香気（少量の分配）<sup>191</sup>にあずかれり。  
功德を有する彼（菩薩）は、功德具有の王家に生まれたり。  
[その]功德海<sup>くどくかい</sup> [たる彼]が、菩提樹の下<sup>もと</sup>に坐したまえり。

それからまた、南西の方角のラトナサンバヴァー<sup>192</sup>（宝生）世界のラトナヤシュティ<sup>193</sup>（宝柱）如来の仏国土から、ラトナサンバヴァ<sup>194</sup>（宝生）と名づける菩薩摩訶薩が、その光明に勧発されて、夥しい数の菩薩〔摩訶薩<sup>195</sup>〕たちに圍繞され侍従せられて、菩提道場へ、また菩薩のところへと近

<sup>183</sup> candrasūryajihmakaraṇaprabha は「月と太陽を暗冥となす光明」の意。方広には「掩蔽日月光」、普曜には「蔽日月光」と訳されている。

<sup>184</sup> vyūharāja は「最高の莊嚴（見事に整列した軍隊）」の意。方広には「莊嚴王」、普曜には「淨王」と訳されている。

<sup>185</sup> 【中巻】には「身業」を「身体」、「語業」を「語」、「意業」を「心（意）」と訳したが、文脈上「身・語・意の三業」に言及している部分であるから、「身業」「語業」「意業」に訂正する。

<sup>186</sup> 「慚恥」とは「恥じること」「恥を知ること」である。

<sup>187</sup> guṇākara は「功德の藏（豊富な功德）」の意。方広にも普曜にも「徳王」と訳されている。

<sup>188</sup> guṇarājaprabhāsa は「功德の王たる光明」の意。方広には「功德光明王」、普曜には「徳明王」と訳されている。

<sup>189</sup> guṇamati は「功德の意思」の意。方広には「功德慧」、普曜には「徳音光明」と訳されている。

<sup>190</sup> レフマン本には【 】内の訳文に当たる原文が挿入されているが、確認できる写本の全てにその原文は欠落しており、チベット訳にもそれに当たる訳文が見当たらないので、削除すべきである。

<sup>191</sup> 「香気」（gandhika）とは「～の香りに触れる」「～の少量を有する」の意であり、チベット訳は「[功德を] 分配されたり」という意味の訳文になっている。

<sup>192</sup> ratnasambhava は「宝石を生ずる」の意。方広には「出寶」、普曜には「樂成」と訳されている。

<sup>193</sup> ratnayāṣṭi は「宝石の柱」の意。方広には「寶幢」、普曜には「寶林」と訳されている。

<sup>194</sup> ratnasambhava は「宝石を生ずる」の意。方広には「出衆寶」、普曜には「寶光明」と訳されている。

<sup>195</sup> 東大主要写本には「摩訶薩」（mahāsattvaiḥ）が挿入されているが、チベット訳には相当訳語がなく、文脈上も不要なので削除すべきである。

づき来たり。来たりて、菩薩の供養のために、無量・無数の宝石の天柱を、その講堂に化作したり。また、それらの宝石の天柱から、次の偈が現出したり。

- 312 6<sup>196</sup>、その人によって、大海を含む[全]大地と、また無数の宝石と、  
 美しい窓と涼房を有する高楼と、また車駕(乗物)や[車駕を]牽く動物と、  
 装飾された天柱と、美妙なる花環と、諸の園林や井戸<sup>197</sup>と、諸の会堂と、  
 手・足・頭・眼などが捨施せられたり。その彼が菩提道場に坐したまえり。

それからまた、北西の方角のメーガヴァティー<sup>198</sup>(有雲)世界のメーガラージャ<sup>199</sup>(雲王)如来の  
 仏国土から、メーガクタービガルジタスヴァラ<sup>200</sup>(雲峰発雷鳴)と名づける菩薩摩訶薩が、その  
 光明に勧発されて、夥しい数の菩薩たちに圍繞され侍従せられて、菩提道場へ、《また<sup>201</sup>》菩薩のと  
 ころへと近づき来たり。来たりて、菩薩の供養のために、カーラーヌサーリアガル<sup>202</sup>(隨時沈水  
 香)の雲を化作し、ウラガサーラチャンダナ<sup>203</sup>(龍勝梅檀)の香末の雨を、その講堂に降らしめたり。  
 また、そのカーラーヌサーリン<sup>204</sup>(隨時香)の雲の円輪から、次の偈が現出したり。

7. [彼は]明知と解脱の光明を有する法の雲により、三界の一切を遍満し、  
 正法と離欲・甘露・涅槃を獲得せしめる雨を降らしめ、  
 一切の、愛欲・煩惱の繫縛の蔓を、習気もろともに断ち切り、  
 諸の禪定・神通・[五]力・[五]根によって<sup>205</sup>開花せしめ、淨信を生ぜしむべし。

- それからまた、北東の方角のヘーマジャーラプラティチャンナー<sup>206</sup>(金網覆蓋)世界のラトナ  
 314 チャットラービウドガターヴァバーサ<sup>207</sup>(宝蓋起光)如来の仏国土から、ヘーマジャーラーランク  
 リタ<sup>208</sup>(金網嚴飾)と名づける菩薩摩訶薩が、その光明に勧発されて、夥しい数の菩薩たちに圍繞  
 され侍従せられて、菩提道場へ、また、菩薩のところへと近づき来たり。来たりて、菩薩の供養  
 のために、それら一切の樓閣と宝石の天柱とに、三十二相によって美しく飾られた菩薩の形像を化

<sup>196</sup> この第6偈は前章(第19章)の第6偈に酷似し、ほぼ同一の内容である。

<sup>197</sup> チベットの訳には「井戸」(kūpa)に当たる訳語がない。

<sup>198</sup> meghavatiは「雲を有する」または「雲の如き」の意。方広には「雲」、普曜には「雨氏」と訳されている。

<sup>199</sup> megharājaは「雲の王」の意。方広には「雲王」、普曜には「雲香王」と訳されている。

<sup>200</sup> meghakūṭābhigarjitasvaraは「雲の峰より轟く音声」の意。方広には「雲雷震聲」、普曜には「積雷雨」と訳されている。

<sup>201</sup> 東大主要写本には「また」(ca)が欠落しているが、文脈上これを挿入すべきである。

<sup>202</sup> kālānūsāry-agaruはkālānūsārin(時に随順する)とagaruの複合語と考えられ、「時に随順する沈水香」の意と見ることが可能である。しかし、kālānūsārinについて、『梵和大辞典』には「安息香」との訳語が挙げられ、BHSDにも some kind of sandalwoodと説明されている。agaru(= aguru)は通常「沈水香」と訳される香料名である。なお、この場面の方広には「沈水香雲及梅檀香雲」との訳文が見られる。

<sup>203</sup> uragasāra-candana(龍勝梅檀)については、第20巻第3号所載の拙訳(註200)を参照されたい。

<sup>204</sup> このkālānūsārin(隨時香：安息香)は上註202のkālānūsāry-agaru(隨時沈水香)を指すものと考えられる。

<sup>205</sup> 『中巻』には「諸の禪定・神通力・機根によって」と訳したが、文脈を勘案して「諸の禪定・神通・[五]力・[五]根によって」に訂正する。この場合、「神通(超自然的な能力)」は「五神通(天眼通・天耳通・他心通・宿命通・神足通)」を、「力(さとりへ至らしめる力)」は「五力(信力・精進力・念力・定力・慧力)」を、「根(解脱に至るための能力)」は「五根(信根・精進根・念根・定根・慧根)」を指すものと考えられる。なお、「五根五力」とは「さとりへの道におもむかせる五つのすぐれたはたらきをもたらすものと、そのはたらき」である(『佛教語大辞典』360頁参照)。

<sup>206</sup> hemajālapratichannāは「黄金の網に覆われた」の意。方広には「金網」、普曜には「樂帛交露」と訳されている。

<sup>207</sup> ratnachattrābhyudgatāvabhāsaは「宝石の傘蓋から光輝を発する」の意。方広には「寶蓋光明」、普曜には「寶蓋起光」と訳されている。

<sup>208</sup> hemajālālamkrītaは「黄金の網に飾られた」の意。方広には「金網莊嚴」、普曜には「嚴帛帳光明」と訳されている。

作したり。また、それら全ての菩薩の形像は天界・人界の花環を持ち、菩薩（釈迦牟尼）の在せるその方向に身を屈めて、それらの花環を垂れ掛けたり。また、[ヘーマジャーラーランクリタ菩薩摩訶薩は] 次の偈を唱えたり。

8. 彼によって、往昔、那由多もの[多くの]仏陀が称讃せられ、

[彼は諸仏に対し] 大いなる敬意をもって淨信を起こし<sup>209</sup>、

梵音声を発して、美妙なる言葉を語ったり。

[その彼が] 菩提道場に來至せるが故に、頂礼せん。

それからまた、下方のサマンタヴィローキター<sup>210</sup>（普観）世界のサマンタダルシン<sup>211</sup>（普見）如来の仏国土から、ラトナガルバ<sup>212</sup>（宝胎）と名づける菩薩摩訶薩が、その光明に勧発されて、夥しい数の菩薩たちに圍繞され侍従せられて、菩提道場へ、また、菩薩のところへと近づき來たり。來たりて、菩薩の供養のために、その瑠璃【製<sup>213</sup>】の講堂に、ジャンブー河産黄金（閻浮檀金）の諸蓮華を出現せしめたり。また、それらの蓮華の花芯に、妙色相を具足しあらゆる装身具に飾られた半身の女人たちを顕現せしめたり。[それらの女人たちは] 左右の手に、首飾り・腕環・肱環・金の紐・真珠の瓔珞などの、種々の装身具を持ち、また、花と綾絹の飾り紐を垂れ掛けて、菩提道場に、また菩薩の在せる方向に身を屈めて、【彼女たちは<sup>214</sup>】次の偈を唱えたり。

9. 彼（菩薩）は、常に、諸の尊師に、

[また] 仏陀・声聞・獨覺仏に稽首せり。

戒を具足し、常に、正念を第一として、慢心なかりき。

功德を有する、その方に、[私たちは] 稽首せん。

それからまた、上方のヴァラガナー<sup>215</sup>（最勝聚）世界のガネンドラ<sup>216</sup>（聚衆王）如来の仏国土から、ガガナガンジャ<sup>217</sup>（虚空藏）と名づける菩薩摩訶薩が、その光明に勧発されて、夥しい数の菩薩たちに圍繞され侍従せられて、菩提道場へ、また、菩薩のところへと近づき來たり。來たりて、菩薩の供養のために、そのまま[上方の] 空中に停住せる時、十方の一切の仏国土に存在する限りの、かつて見られたことも聞かれたこともなき、[あらゆる] 花・薫香・香料・花環・塗油・香末・衣・着物<sup>218</sup>・装身具・傘蓋・旗幟・幢幡・軍旗<sup>219</sup>（勝利を予知する幢）・宝石・宝珠・金・銀・真珠・瓔珞<sup>220</sup>・馬・象・戦車・歩兵・馬車・【開花した<sup>221</sup>】樹木・枝葉・花卉・果実・童男・童女・天・竜・

<sup>209</sup> チベット訳は「敬意をもって大淨信を起こし」という意味の訳文になっている。

<sup>210</sup> samantavilokitā は「周りに一面を照らす」「周りを眺める」の意。方広には「普観」、普曜には「普明」と訳されている。

<sup>211</sup> samantadarśin は「普く見る」の意。方広には「普見」、普曜には「普現」と訳されている。

<sup>212</sup> ratnagarbha は「宝石の胎藏」の意。方広には「寶藏」、普曜には「寶藏光明」と訳されている。

<sup>213</sup> 【製】(maya) は多くの写本に挿入されているが、チベット訳にはこれに当たる訳語はないので、削除すべきか？

<sup>214</sup> 既刊校訂本はいずれも「彼女たちは」(tās) を挿入しているが、チベット訳にはこれに当たる訳語はない。

<sup>215</sup> varagaṇā は「最勝なる聚衆」の意。方広には「殊勝功德」、普曜には「虚空」と訳されている。方広は gaṇā を gaṇa と読み、普曜は gagaṇa と読んだものと思われる。

<sup>216</sup> gaṇendra は「聚衆の帝王」の意。方広には「徳王」、普曜には「無限眼王」と訳されている。

<sup>217</sup> gagaṇagaṇja は「虚空の宝庫」の意。方広には「虚空藏」、普曜には「虚空藏光明」と訳されている。

<sup>218</sup> チベット訳には「着物」(vastra) に当たる訳語はない。

<sup>219</sup> 【軍旗】(vajrayanti) は、チベット訳には「勝利の旗」(rnam par rgyal baḥi khaṅ pa) と訳されている。

<sup>220</sup> 【真珠・瓔珞】(muktāhāra) は、チベット訳には単に「真珠」(mu tig) と訳されている。

<sup>221</sup> チベット訳には「開花した」(puṣpa) に当たる訳語はなく、文脈上も不要であるから、削除すべきか？

夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅迦・帝釈・梵天・護世王・人類・鬼類<sup>222</sup>などの、  
全てが空中より花の<sup>223</sup>大雨を降らしめたり。[その雨は] 全ての衆生<sup>224</sup>に歓喜と安樂を生ぜしめる  
ものにして、いかなる衆生にも恐怖や危害を与えざりき。<sup>225</sup>

そこで、かくの如く言われる。

10. 略説すれば、かくの如し<sup>226</sup>。利益者（菩薩）を供養するために、  
諸方より<sup>227</sup>、菩提〔樹〕に來至せるところの仏子たち<sup>228</sup>（諸菩薩）、  
彼ら諸仏子の、歩行・勇進・美しき歩調の莊嚴は、  
譬喩<sup>ひゆ</sup>によつてのみ、これを聞くべし。<sup>229</sup>

11. ある者たちは、天空より、雷雲の如き音を響かせて、  
千<sup>230</sup>那由多<sup>ないうた</sup>もの瓔珞を垂れ掛けながら、來至せり。  
ある者たちは、宝冠<sup>ほうかん</sup>を著け辮髪<sup>べんぱつ</sup>を垂れて、  
空中に花の宮殿を示現しつつ、來至せり。

12. ある者たちは、地上より、獅子の如くに吼えながら、  
空・無相・無願<sup>くうむそうむがん</sup>の音聲<sup>おんじやう</sup>を<sup>231</sup>発しつつ、來至せり。  
ある者たちは、牡牛の如く嘶きながら、  
かつて見られたことなき、美しき花を散らしつつ、來至せり。

320 13. ある者たちは、空中より、孔雀の如く啼きながら、  
自らの身体の千の色相を示現しつつ、來至せり。  
ある者たちは、空中より、月の如く盈満しつつ、  
善逝<sup>ぜんせい</sup><sup>232</sup>の子（釈迦菩薩）の功德<sup>こくどく</sup>の蔓<sup>かづら</sup>を称揚しながら、來至せり。

14. ある者たちは、太陽の如く光明を發しながら、  
一切のマール（惡魔）の宮殿を暗冥<sup>あんみやう</sup>となしつつ、來至せり。  
福德資糧<sup>ふくとくしりやう</sup><sup>233</sup>を積集せる、ある者たちは、インドラの杖<sup>しやくじやう</sup><sup>234</sup>（虹）の如き  
明<sup>みやうじやう</sup>淨なる旗を持って、その菩提道場に來至せり。

<sup>222</sup>「鬼類」(amānuṣya) とは「人ならざるもの」の意である。

<sup>223</sup>チベット訳には「花の」(puṣpa) に当たる訳語はない。

<sup>224</sup>チベット訳には「衆生」(sattva) に当たる訳語はない。

<sup>225</sup>チベット訳には、この箇所「以下、略説する」との文が挿入されている。

<sup>226</sup>チベット訳には「略説すれば、かくの如し」に当たる訳文は見当たらない。上註225に示した挿入部分に該当するが、チベット訳ではこれが偈の外に置かれていることになる。

<sup>227</sup>「諸方より」は、チベット訳では「それら十方より」という意味の訳文になっている。

<sup>228</sup>「仏子」(jina-aurasa) とは「勝者（仏陀）の嫡出子」の意であり、「仏子」と訳される。「仏子」には「仏弟子」「佛教信者」などの意味もあるが、ここでは文脈上「成仏を目指す菩薩たち」「仏陀の愛弟子たる諸菩薩」を指すものと考えられる。

<sup>229</sup>本偈（第10偈）の下二行に当たるチベット訳は「彼ら、衆生を利益する者たちの莊嚴、諸の歩行・勇進・美しき歩調などの、譬喩のみを開け」という意味の訳文になっている。

<sup>230</sup>チベット訳には「千」(sahasra) に当たる訳語はない。

<sup>231</sup>チベット訳は「空・無相・無願こそ最上なり」という意味の訳文になっている。「空・無相・無願」は「三解脱門・三空觀門・三空門」ともいい、解脱への方法となる三種の禪定の内容を示すもの（『佛教語大辞典』283頁参照）。

<sup>232</sup>「善逝」(sugata) とは「よくゆきし人」「立派に完成した者」「智慧の力で煩惱を断じ、その最後の結果に到達した人」という意味で、「仏の十号の一つ」として用いられる。『佛教語大辞典』850頁参照。

<sup>233</sup>「福德資糧」とは「仏道実践の基となる福德行」の意である。方広には「福慧資糧」と訳されている。

<sup>234</sup>「インドラの杖」(indra-yaṣṭi) は、「インドラの弓」(indra-cāpa) と同じく、「虹」の意味で用いられる。方広には「虹蜺」と訳されている（上註5参照）。

15. ある者たちは、空中より、珠寶の網を散らし、  
また、昇ったばかりの妙月の〔如き〕煌煌たる輝きを放ちつつ、  
マーンダーラヴァ・スマナス・ヴァールシカ・チャンパ（カ）<sup>235</sup>の  
花環を、樹王下に坐せる菩薩（釈迦牟尼）に散じたり。
16. ある者たちは、両足で大地を震動させながら来至せり。  
大地は震動すれども、有情（生き物）には歡喜を生じたり。  
ある者たちは、メール山<sup>236</sup>を掌に執持して来至し、  
〔そのまま〕空中に立って、花筐<sup>237</sup>を散じたり。
17. ある者たちは、四大海<sup>238</sup>を頭上に載せて来至し、  
大地に芳香ある水を灑ぎ、〔大地を〕清めたり。  
ある者たちは、色々な宝石の杖を持って来至し、  
遠方に立って、菩薩に見せたり。<sup>239</sup>
- 322 18. ある者たちは、梵天の〔如き〕安穩なる容貌を化現して来至し、  
靜穩にして寂靜なる心意を保ち、禪定に安住せり。  
彼らの諸毛孔からは、〔慈・悲・棄・捨は無量なり<sup>240</sup>〕との、  
甘美なる音声を発したり。
19. ある者たちは、帝釈天さながら、まさにその如くに、  
千那由多もの〔多くの〕天神たちに侍従せられて来至し、  
彼らは菩提樹に近づき、合掌して敬礼し<sup>241</sup>、  
帝釈天が着用する種々の珠寶を散じたり。
20. ある者たちは、まさに四方の護世王（四天王）の如く、  
乾闥婆・羅刹・緊那羅たちに圍繞せられて来至し、  
稲妻の〔如き〕赫奕たる花の雨を降らせつつ、  
乾闥婆や緊那羅の音声を以て勇者<sup>242</sup>（釈迦牟尼）を讚歎せり。
21. ある者たちは、花の咲ける樹木を、〔また〕果実をつけ、  
花をつけて最勝なる芳香を発する〔樹木〕を持って来至せり。  
それらの<sup>243</sup>葉の上には、半身の仏子たち（諸菩薩）が坐しており、  
身を屈めて、菩提の座（菩提道場）に諸の花を散じたり。
22. ある者たちは、パドマ（蓮華）・ウトパラ（青蓮）・また、

<sup>235</sup> これらの花名の原語は、前から順に māṇḍārava, sumanas, vārṣika, campaka(ka) である。campa は通常は campaka であるが、ここでは韻律によって最後の ka が省略されている。

<sup>236</sup> 「メール山」(meru) は、方広には「須彌大山王」と訳されている。

<sup>237</sup> puṣpa-puṭa は通常「花の萼」の意であるが、ここではチベット訳 (me tog skon bu) を参考に「花筐」と訳す。「花筐」とは「花を入れた箱」の意である。方広には「花甕」と訳されている。

<sup>238</sup> 「四大海」とは「須彌山の四方にある四つの大海」を指す。方広には「四大香水海」と訳されている。

<sup>239</sup> 本偈（第17偈）の下二行に当たるチベット訳は「ある者たちは、色々な宝石の杖を持ち、遠方に立って、菩薩に見せながら、来至せり」という意味の訳文になっている。

<sup>240</sup> 「慈・悲・棄・捨」は「四つのはかりしれない利他の心」であり、「四無量心」とも「四梵住」とも呼ばれる。

<sup>241</sup> チベット訳には「敬礼し」(prahva) に当たる訳語は見当たらない。

<sup>242</sup> 「勇者」(vira) は、チベット訳には「堅固なる者」(brtan pa[= dhīra]) と訳されている。

<sup>243</sup> チベット訳には「それらの」(te) に当たる訳語はない。

- ブンダリーカ（白蓮）などの花が咲ける池を把持<sup>はじ</sup>して、来至せり。  
 [それらの] 蓮華の中心には、三十二相を具足せる者たちが坐して、  
 執著なき心を有する、賢明なる菩薩（釈迦牟尼）を讃歎せり。
- 324 23. ある者たちは、同じく、メール山の如き広大な身体を化現して来至し、  
 空中に停立<sup>ていりつ</sup>して、自らの身体を抛棄<sup>ほうき</sup>せり。  
 抛棄するや否や、[それらの身体は] 新鮮なる<sup>244</sup>花鬘<sup>けまん</sup>と成って、  
 三千[世界]の勝者（仏陀）の国土を覆い尽くしたり。
24. ある者たちは、両眼に、劫火<sup>こうか</sup> [の如きもの]<sup>245</sup>と、また、  
 [劫の] 発生と消滅とを示現しつつ、来至せり。  
 彼らの身体からは、多くの法門 [の教え] が鳴り響き、  
 それらを聞かば、那由多<sup>なよた</sup>もの [多くの] 衆生が渴愛<sup>かつあい</sup>を断じたり。
25. ある者たちは、緊那羅<sup>きんなら</sup><sup>246</sup>の如き声で歌いながら来至し、  
 唇はビンバ果<sup>びんばく</sup><sup>247</sup>の如くにして顔容<sup>げんよう</sup>うるわしく、面貌<sup>めんぼう</sup>よく円満せり。  
 色々な瓔珞で美しく飾りたてたる娘たちの如くにして<sup>248</sup>、  
 それを見るや、天神衆<sup>てんじんしゅう</sup>といえども厭足<sup>えんそく</sup>することなかりき。
26. ある者たちは、金剛<sup>こんこう</sup>の如く破碎されざる [堅固な] 身体を有し、  
 足を以て地下の水聚<sup>みずじゅ</sup><sup>249</sup>を掘り出しつつ、来至せり。  
 ある者たちは、太陽の如き [また] 満月の如き顔面ありて、  
 光輝を放ち、光明を発して、[衆生の] 煩惱・罪過を滅除せり。
27. ある者たちは、宝石で身を飾り、手に宝石を持って来至し、  
 幾千拘胝<sup>いくせんこてい</sup>もの [多くの] 国土を覆い尽くしたり。  
 多くの衆生に《利益<sup>250</sup>と安楽 [の獲得<sup>251</sup>] と満足とを与えるために、  
 最勝なる宝石・花・妙香<sup>みょうこう</sup>の雨を降らしめたり。
- 326 28. ある者たちは、偉大なる陀羅尼<sup>だらに</sup>の宝蔵<sup>ほうそう</sup>を生じ、  
 諸々の毛孔より那由多<sup>なよた</sup>もの [多くの] 經典を演説しつつ来至せり。  
 [彼らは] 弁才<sup>べんさい</sup>を具足し、英知<sup>えいし</sup>を具え、すぐれた覚知<sup>かくち</sup>を有し、  
 酩酊<sup>めいてい</sup>し惑乱<sup>わくらん</sup>せる民衆<sup>みんしゅう</sup>を覚醒<sup>かくせい</sup>せしめたり。
29. ある者たちは、メール山の如き [巨大な] 太鼓を持ち、打ち鳴らして、  
 空中より美妙なる音を発しつつ、来至せり。  
 その音は、十方<sup>じふぱう</sup>の拘胝<sup>こてい</sup>もの [多くの] 国土に響きわたり、

<sup>244</sup> チベット訳には「新鮮なる」(nava) に当たる訳語はない。

<sup>245</sup> 「劫火」(kalpa-dāha) は、チベット訳では「劫火の如きもの」という意味の訳文になっている。「劫火」とは「一つの劫の終わり、つまり宇宙の破壊の時期（壊劫）の終末に起こる火災」をいう。方広には「劫焼」と訳されている。

<sup>246</sup> 「緊那羅」は「美妙な音声をもち、よく歌舞をなす天の樂神」（『佛教語大辞典』250頁参照）である。

<sup>247</sup> bimba 樹の果実は熟すると赤色になるので、美人の唇に譬えられる。

<sup>248</sup> チベット訳は「色々な瓔珞を美しく飾って盛装せる娘の如く」という意味の訳文になっている。

<sup>249</sup> 「地下の水聚」とは「地下の水脈」の意である。

<sup>250</sup> 「利益」(hitam) は東大主要写本には欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>251</sup> 東大主要写本には「獲得」(āpana) が挿入されているが、これは文脈上も韻律上も不要であるから、削除すべきである。



「師（釈迦菩薩）は甘露<sup>かんろ</sup>を会得<sup>えとく</sup>して<sup>252</sup>、今宵<sup>こよい</sup>正覚せん」と知らせたり。

〔以上〕「菩提道場莊嚴品」と名づける第20章なり。

---

<sup>252</sup>チベット訳は「甘露を〔まだ〕得ざりし師は」という意味の訳文になっている。「甘露」(amṛta)は、ヒンドゥー教神話において、「それを飲めば不死を得るとされる靈薬」であるが、仏教では「不死の境地たる悟りの至福」を意味する言葉として用いられる。